日宋・日元貿易期における「南島路」と硫黄交易

The South Island Route and Sulfur Trade between Japan and China in the Song and Yuan Periods

山内晋次

YAMAUCHI Shinji

はじめに
❶文献史学研究からみた「大洋路」と「南島路」
❷琉球から明への硫黄の進貢
❸ふたつの中国史料からみた硫黄交易
❹中国陶磁の流通からみた「南島路」と硫黄交易
❺14世紀半ば以前の琉球列島における硫黄交易
おわりに

［論文要旨］

現在の文献史学研究において，日宋・日元貿易期（10 世紀末～ 14 世紀半ば）の日本と中国を結ぶ幹線航路が，博多―舟山群島―明州（慶元）・杭州という「大洋路」とも呼ばれる東シナ海横断ルートであるという点は，現存史料による限り動かし難い結論であろう。ところが，14 世紀中葉の元明交代期になると，文献史料のなかに（博多―）肥後高瀬―薩摩―琉球―福建という，南西諸島を経由して中国東南部の福建地域とつながる「南島路」とでも呼ぶべき航路に関する記録があらわれる。

本稿では，南西諸島を含む日本列島と中国の間でおこなわれた硫黄交易史の視野を主軸としつつ，文献史学・考古学双方の成果をすりあわせることにより，この「南島路」の一側面を考察した。そして，その結果，沖縄の硫黄鳥島が中国向けの硫黄鉱山として従来考えられているよりも古くから稼働し始めていた可能性や，その島で産出された硫黄が沖縄島に分立した諸王権と明王朝との政治・経済関係の形成の初発の時点においても軍需物資として重要な役割を演じていた可能性などを推定した。

【キーワード】南島路，琉球，硫黄鳥島，硫黄交易

はじめに

現時点の文献史学側からの日宋・日元貿易史研究において，当該期（10世紀末～14世紀半ば）の日本と中国を結ぶ幹線航路が，博多から舟山群島を経由して明州（慶元）・杭州を結ぶ東シナ海横断ルート〈以下，中国南部・南西諸島・台湾の地名に関しては本稿末尾掲載の「主要関連地名地図」参照〉であるという点は，すくなくとも現存史料による限り動かし難い結論であろう［榎本2007a・b，2010a：36・44-45，2010b：59-60］。京都東福寺の塔頭栗棘庵に所蔵されている南宋期の『輿地図』では，このような東シナ海横断ルートを「大洋路」と呼んでいる［榎本2007a：41-43，橋本2007：158，森克己2009］。

ところが，14世紀中葉の元明交代期になると，文献史料のなかに（博多―）肥後高瀬―薩摩―琉球―福建という，南西諸島を経由して中国東南部の福建地域とつながる「南島路」とでも呼ぶべき航路に関する記録が登場する。ただ，この「南島路」の具体的な実態については，その時期の南西諸島内部においてまったくといってよいほど文字史料が残存していないだけでなく，日本・中国などの周辺地域においてもごく限られた文献史料しか残されていないため，文献史学の側からその細部に迫ることはきわめて困難である。とはいえ，日宋・日元貿易期の南西諸島地域に関する研究は，近年の文献史学においても漸進的にではあれ進みつつあり，このような文献史学側の諸成果を，いっぽうでめざましい進展をみせている考古学研究の諸成果と接続することにより，従来の諸研究を超えてさらに一歩，「南島路」の実態に迫ることは可能であると思われる。

本稿では，これまで私が研究を続けてきた，南西諸島を含む日本列島と中国の間でおこなわれた硫黄交易の歴史を主軸としつつ，文献史学・考古学双方の成果をすりあわせながら，この「南島路」の一側面を考察してみたい。

❶……文献史学研究からみた「大洋路」と「南島路」

日宋・日元・日明交流史研究の一環として，文献史学の側からこの「大洋路」と「南島路」の問題について積極的に発言をおこなってきたのは，榎本涉と橋本雄である。

（1）榎本涉説の概要

まず，榎本涉の論の概要はつぎのようなものである。日宋貿易の開始期である10世紀末に杭州と明州に市舶司が設置されたことにより，両浙（浙東・浙西）から海外に渡航する商船はすべて杭州・明州から出航することが義務づけられた。これをうけて11世紀には，日宋貿易を担う商船の発着地はほぼ明州（および延長航路上の杭州）に一本化されていく。この航路は日本から舟山群島を経由して明州・杭州に至るものであり，南宋期の地図には「大洋路」と記されている。こののち12世紀には，一時的に江陰などの長江沿岸の港湾への商船の発着もみられたが，12世紀末以降，ふたたび政策的に発着地を明州に限定しようとする動きがみられ，この原則はつぎの元朝にも受け継がれたようである。このため13世紀から14世紀前半までの事例では，文献史料からみる限り，漂流など

の特殊な場合を除いて，ほとんどの商船が博多―北九州沿岸部・五島列島―明州（慶元）というルートを利用しており，例外的に1262年に慶元を出発して薩摩国川辺郡に来着した商船の事例があげられるのみである。つまり，この時期においてもやはり，いわゆる「大洋路」が圧倒的な比重を占めているのである［榎本2007a：41-48，2010b：45］。

ところが，14世紀後半の元末（1348-1367）になると，中国では江浙沿海部での方国珍・張士誠の反乱やのちの明朝の成立につながる内陸部を中心とする諸反乱が続発し，さらには高麗における倭寇の活発化などもあり，従来の慶元（明州）を中軸とする日中間の海上交通・貿易においてもいちじるしく治安が悪化し，他のより安全な航路・港湾が模索された。そしてそのひとつとして，福建―薩摩―高瀬―博多という南方を経由する航路が利用されるようになった［榎本2007b］。このような南方ルートは琉球も経由しており，この航路の前提には小規模ながらもおこなわれていた元末以前の福建―琉球間の貿易があったことが想定されている［榎本2010a：204］。また，このルートの発展が日本―琉球―元間の交通の活性化をうながし，琉球における三山王権の分立や1372年以降のそれらの王権と明との朝貢・貿易関係の展開の背景となった可能性も指摘している［榎本2007b：192］。

（2）橋本雄説の概要

つぎに橋本雄の主張の概略をみてみよう。橋本は，14世紀中葉になると肥後国の高瀬が対外交通の港湾として史料上にしばしば姿をあらわすことに注目し，そこからさらに薩摩―琉球―福州と伸びる新たなルートを想定する。橋本は，この新たなルートを「南島路」と呼び，そのルートが利用されるようになった背景として，おもに上述の榎本渉の研究に依拠しながら，前期倭寇の猖獗と元末明初の混乱による東アジア海域の不安定化により博多―明州（慶元）のいわゆる「大洋路」の利用が避けられたという事情を指摘している。そしてさらに，この「南島路」の活性化によって，大量の中国陶磁器の琉球列島への流入や北山・中山・南山という琉球諸王権の誕生などの琉球列島の「文明化」がひきおこされたのではないか，という歴史的見通しを述べている［橋本2005：122-126，2007：158-160］。

以上のような榎本渉・橋本雄らの研究によって，14世紀半ばの元末・明初において，九州西岸から南西諸島を経由して福建地域に至る航路が活性化したことが明確に認知されるようになり，文献史学における日元・日明関係史研究に新たな視野がつけ加えられた。このような文献史学側からの新たな提言は，考古学研究にも大きな刺激を与えたが，その考古学側の研究動向についてはのちにあらためて紹介・検討することとし，ここではまず，榎本・橋本双方が，考古学研究の成果にも言及しつつ，元末・明初の「南島路」の活性化にはすでにそれ以前に当該ルートを利用して小規模ながらもおこなわれていた交易の前史があること，およびその活性化が琉球における王権の形成や明との政治・経済的な関係の形成に大きな影響を及ぼした可能性があることなどを推定している点に，とくに注目しておきたい。

以下本稿では，榎本・橋本の提言をふまえつつ，私がこれまで研究してきたアジアにおける硫黄流通史という視座を主軸として，明代以前の「南島路」の実像をさらに探ってみたい。

❷……琉球から明への硫黄の進貢

南西諸島を経由して九州と中国南部を結ぶ「南島路」の実態に迫るうえで，有望なアプローチ素材として近年注目があつまりつつあるのが，硫黄交易の問題である。私はこれまで，日本列島産の硫黄が海上貿易を通じて宋・元・明代の中国に輸出され，そこで火薬原料として利用された歴史的過程を研究してきた［山内2009・2014・2016・2019］。そして，その研究成果のひとつとして，文献史料からみて14世紀ころに開始された琉球の諸王権から明皇帝への硫黄の進貢が，東アジアにおける国際的な硫黄流通構造の重要な転換点となっている可能性を指摘した［山内2019］。この琉球から明への硫黄の運搬はもちろん，東シナ海を横切って琉球と福建を結ぶ海上ルートによるものであり，この航路はまさに本稿で問題としている「南島路」の南半部である。

（1）硫黄進貢開始期の状況

この琉球から明への硫黄の進貢に関して，本稿でまず注目したいのは，それが開始された14世紀後半の状況である。この進貢開始期の状況を記録する同時代の史料は『明実録』所載の諸記事である。そこで，その『明実録』にもとづいて，進貢開始期の歴史状況をみてみたい。

1368年の明王朝の成立からほどなく，洪武帝は1372年に行人楊載を琉球に派遣し，明への朝貢をうながした（『明実録』太祖・巻71・洪武5年正月甲子条）。この時期の琉球は，沖縄島に山北（北山）・中山・山南（南山）という王権が鼎立して覇権を争っていた，いわゆる三山の時代である。この洪武帝の招諭にいちはやく反応して明への遣使・朝貢を開始したのは，中山王の察度であった（『明実録』太祖・巻77・洪武5年12月壬寅条）。このときの中山王察度から洪武帝への貢物の内容は具体的に記録されていないが，ここで形成された琉球の王権と中国王朝との朝貢・貿易関係は，周知のようにその後約500年にわたって継続していく。

このようにして開始された琉球と明の朝貢・貿易関係のなかで，琉球から硫黄が進貢された最初の記録は，1376年に，明の使者李浩が馬40匹と硫黄5,000斤（1斤＝約600g，約3t）を琉球で購入して帰国した際に，中山王察度がこれに付して遣使し，硫黄4,000斤（約2.4t）を貢上したという記事である（『明実録』太祖・巻105・洪武9年4月甲申朔条）。さらにこの翌年の1377年には，ふたたび中山王察度が硫黄1,000斤（約600kg）を貢上している（『明実録』太祖・巻111・洪武10年正月是月条）。中山王察度はこののちも，1382年に2,000斤（約1.2t）（『明実録』太祖・巻142・洪武15年2月乙丑条，ただし原文は「二十斤」），1386年には11,000斤（約6.6t）（『明実録』太祖・巻177・洪武19年正月辛酉条）の硫黄をそれぞれ貢上している。山北・山南の2王権については，中山王よりもすこし遅れてそれぞれ明と朝貢・貿易関係を結び，山北王の帕尼芝が1390年に2,000斤（約1.2t）の硫黄を貢上し（『明実録』太祖・巻199・洪武23年正月庚寅条），山南王の承察度が1394年に中山王察度とともに遣使して硫黄（数量不明）を貢上している（『明実録』太祖・巻231・洪武27年正月乙丑条）。

以上のような硫黄進貢の開始期から30年程くだると，琉球の外交文書集『歴代宝案』にその進貢の記録が残されるようになる。そこで，1420年代の尚巴志による三山統一頃までのその進貢記録を追っていくと，以下のようになる。

1 集 - 巻 43-02 号	洪熙元（1425）年 12 月 17 日付	山南王他魯毎の礼部宛咨文	5,000 斤
1 集 - 巻 16-04 号	洪熙元（1425）年 12 日 17 日付	中山王尚巴志より礼部宛咨文	15,000 斤 （30,000 斤小〈粗鉱〉）
1 集 - 巻 16-01 号	洪熙元（1425）年閏 7 月 17 日付	中山王尚巴志より礼部宛咨文	20,000 斤 （40,000 斤小）
1 集 - 巻 16-03 号	洪熙元（1425）年閏 7 月 17 日付	中山王尚巴志より礼部宛咨文	20,000 斤
1 集 - 巻 16-05 号	宣徳元（1426）年付	中山王尚巴志より礼部宛咨文	5,000 斤
1 集 - 巻 23-01 号	宣徳元（1426）年 3 月 11 日付	中山王尚巴志より使者阿蒲察都等宛符文	10,000 斤
1 集 - 巻 16-06 号	宣徳 2（1427）年 4 月 17 日付	中山王尚巴志より礼部宛咨文	5,000 斤
1 集 - 巻 16-07 号	宣徳 3（1428）年正月 14 日付	中山王尚巴志より礼部宛咨文	8,000 斤
1 集 - 巻 16-10 号	宣徳 3（1428）年 9 月 2 日付	中山王尚巴志より礼部宛咨文	7,500 斤
1 集 - 巻 43-06 号	宣徳 3（1428）年 12 月 13 日付	山南王他魯毎より礼部宛咨文	3,000 斤

これらの文書にみられるように，中山王尚巴志による三山統一の頃には，中山王より毎年 5,000 斤（約 3t）～ 20,000 斤（約 12t）〈粗鉱では 40,000 斤（約 24t）〉の硫黄が明に貢上されている。さらにこれとならんで，山南王からも 3,000 斤（約 1.8t）～ 5,000 斤（約 3t）の硫黄が貢上されている。この当時の中山王と山南王の関係については詳しくはわからないが，いずれにしろこの時期においては，さきにみた 14 世紀後半の段階よりも大量の硫黄が安定的に明に運ばれていたことがみてとれる。

また，以下の諸文書から，三山統一の頃には中山王から，明ばかりでなく東南アジアの暹羅（タイ）にも 2,500 斤（約 1.5t）程度の硫黄が継続して送られていたこともわかる。

1 集 - 巻 40-01 号	洪熙元（1425）年付	中山王より暹羅国宛咨文	2,500 斤 （3,000 斤小）
1 集 - 巻 40-02 号	洪熙元（1425）年付	中山王より暹羅国宛咨文	2,500 斤 （3,000 斤小）
1 集 - 巻 40-03 号	洪熙 2（1426）年 9 月 10 日付	中山王より暹羅国宛咨文	2,500 斤 （3,000 斤小）
1 集 - 巻 40-04 号	宣徳 2（1427）年 9 月 17 日付	中山王より暹羅国宛咨文	2,500 斤 （3,000 斤小）
1 集 - 巻 40-05 号	宣徳 3（1428）年 9 月 2 日	琉球国中山王より暹羅国宛咨文	2,500 斤 （3,000 斤小）

なお，『明実録』では，1398（洪武 31）年以降は，中山王察度・世子武寧および中山王尚巴志による硫黄進貢記事のみとなるので（『明実録』太祖・巻 256 洪武 31（1398）年 3 月 1 日条，巻 257・洪武 31（1398）年 4 月 1 日条，巻 257・洪武 31（1398）年 4 月 13 日条，宣宗・巻 22・宣徳元（1426）年 10 月 21 日条），このころ以降，尚巴志による三山の統一に至る過程で，中山王権による硫黄流通ルートの独占がしだ

いに進んでいったものと思われる。

これまでみてきたように，明と琉球の朝貢・貿易関係が開始されると同時に，琉球から大量の硫黄が明に運び込まれるようになる。このように両者の関係が形成された当初から硫黄が朝貢品としてクローズアップされた背景は，硫黄とならんで当初から貢上された馬の事例から推測することができる。曹永和および平田守は，明朝成立期における琉球招諭・優遇の要因のひとつとして，北元との軍事的緊張がいまだ続いていた明にとって，琉球の馬が軍需物資として重要であったという点を指摘している［曹 1992：24，平田 1986：91］。このような軍馬としての貢上という状況を参考にすれば，おなじく明初における軍需物資の確保という点からして，火薬原料としての硫黄もまた明朝にとって重要なそれであったはずであり［村井 2019：108］，その王朝と琉球の三山王権との間で朝貢・貿易関係が成立した当初から硫黄が進貢されていた理由は，まさにこの点にあったと考えられる。

（2）進貢開始期の状況をめぐる問題点

琉球の三山王権と明との朝貢・貿易関係が開始された頃の以上のような硫黄進貢状況に関して，私がとくに注目し，問題としたいのは，以下のふたつの点である。

まず注目されるのは，明朝と琉球の三山王権との間で朝貢・貿易関係が結ばれた当初から，琉球から明に「トン単位」の硫黄が継続的に送られている点である。この点は，1370年代においてすでに，三山王権の所在地である沖縄島で「トン単位」の大量の硫黄が確保できるほどの硫黄流通ネットワークが確立されていたことを前提にしなければ理解し難い状況であろう。ただ，沖縄島周辺の地質状況を思い浮かべると，当該地域にはそもそも硫黄が産出される火山がみあたらないように思われる。しかし1カ所だけ，現在でも活発な火山活動により硫黄を生成し続けている火山島がある。それは，沖縄島の北方約110km，徳之島の西方約65kmに浮かぶ硫黄鳥島である[(1)]。現時点で私は，三山の王たちから明に貢上された大量の硫黄は，おもに[(2)]この島で採鉱されたものであると推定しているが，この点を立証するにあたって障壁となるのが，14世紀半ばあるいはそれ以前の硫黄鳥島での硫黄採掘を記録した史料が残されていないという点である。現存史料による限り，この島での硫黄の採掘を明記した最古の記録は，1471年に朝鮮の申叔舟によって著された『海東諸国紀』である［豊見山 2002：274］。その付図のひとつの「琉球国之図」に「鳥島」が描かれており，そこに「琉球を去ること七十里なり。此の島の硫黄は琉球国の採る所なり。琉球に属す」という注記が付されている。ここからは，15世紀後半の硫黄鳥島が，琉球国の版図にある，いわば国営硫黄鉱山のような状況であったことがわかるが，それ以前の事情についてはなにもふれるところがなく，不明とせざるをえない。

私が注目したいもうひとつの点は，若干の時間差があるとはいえ，中山・山北・山南のすべての王から硫黄の進貢がおこなわれている点である。この点に関して，もうすこし詳しく史料をみていくと，山北王・山南王（および王淑）が中山王（および世子）と共同で遣使し，硫黄を貢上している事例がいくつもみられる（『明実録』太祖・巻199・洪武23年正月庚寅条，巻231・洪武27（1394）年正月25日条，巻236・洪武28（1395）年正月是月条，巻245・洪武29（1396）年4月20日条，巻248・洪武29（1396）年11月24日条，巻250・洪武30（1397）年2月3日条，巻255・洪武30（1397）年12月15日条）。上述のように，

沖縄島周辺地域における硫黄産地は硫黄鳥島のみであり，三山の王たちが入手した硫黄もおもにこの島で採鉱されたものであったと推定される。そうするとたとえば，3つの王権が，硫黄鳥島そのものあるいはそこで採鉱される硫黄の権益を分有し，それぞれが独自の集荷ルートを確保していたという形態を想定することができるかもしれない。しかし，南北約2.7km，幅約1km，周囲約8kmのごく小さな島で，なおかつ硫黄が生成されている火口が北端の1カ所のみという硫黄鳥島の内部において，沖縄島で覇権を争っていた3つの王権による権益の分配がスムーズにおこなわれていたとは考え難い。それよりはむしろ，三山王権の間を立ち回って硫黄鳥島の硫黄の供給を請け負っていた，共通する交易勢力が存在した可能性が高いのではなかろうか。この点に関してはすでに上里隆史が，「三山の政治対立とは別個の商品流通経路と，三山と一定の距離を保った運び手の存在を考えざるをえない」と本稿と同様の指摘をし，さらに踏み込んで硫黄の貢上を含めた朝貢活動を仲介していた勢力として「久米村に代表されるような外交・交易のノウハウを有する那覇の専門集団」を想定している［上里2010：145-146］。また，高橋公明は，複数の人物が山南王・中山王両方の遣明使節として記録されている点に注目し，当時は使節と王との間にいまだ強固な主従関係がなく，王朝が使節を委託するというような方式があったことを想定しているが［高橋1994：307］，このような使節たちも私や上里が想定する交易・仲介勢力の有力な候補のひとつであろう。しかし残念ながら，そのような交易・仲介勢力の実態を具体的に明記した史料をみいだすことはできない。

以上のような，琉球から明への硫黄進貢開始期の状況をめぐって私が注目するふたつの論点に関しては，どちらについても直接的・具体的にそれらの状況を記録した同時代史料は残されていない。しかし，これらふたつの点は，1370年代以前においてすでに，硫黄鳥島での硫黄の産出が発見され，それが中国王朝向けの進貢品（交易品）となりうることが認知され，さらにはその硫黄を採鉱・集荷するシステムがある程度の継続性・安定性をもって確立されていた，というような歴史状況を前提としなければ理解できない状況であろう。つまり，琉球の三山の王たちが明に対して硫黄の進貢を開始する以前にすでに，何者かが硫黄鳥島での硫黄の産出とそれが対中国向けの交易品となることを発見・認知し，それを組織的に採鉱・交易していたと考えざるをえないのである。硫黄の交易史をめぐるこのような可能性については，吉成直樹も同様な歴史状況を推測しており，薩摩硫黄島・硫黄鳥島という優良な硫黄産地を有した「南島路」は「硫黄ルート」とも呼べると述べている［吉成2018：111］。とはいえ，くりかえしになるが，そのような1370年代以前の歴史状況を明記する史料は残存していない。では，これらの問題は不可知の問題として放置しておくしかないのであろうか。私は，研究史上すでに周知の史料ではあるが，次章で提示するふたつの中国史料が，これらの問題をあらためて検討するにあたって重要なヒントを与えてくれると考えている。

❸……ふたつの中国史料からみた硫黄交易

（1）『明実録』にみえる琉球国民の硫黄採鉱記事

本章で注目したい中国史料のひとつめは，明と琉球の朝貢・貿易関係が形成されてから20年程のちの，『明実録』太祖・巻217・洪武25（1392）年5月己丑条にみえる，以下のような記事である。

琉球国の民才孤那等二十八人を遣(はな)ちて，国に還らしむるに，人ごとに鈔五錠を賜う。初め才孤那等，舟を河蘭埠に駕(の)り，硫黄を採らんとするに，海洋において大風に遇い，漂いて小琉球の界に至る。水を取らんとして殺さるる者八人にして，余は脱することを得たり。また風に遇い飄いて恵州の海豊に至る。邏卒の獲うる所となるに，言語通ぜずして，以て倭人となす。轉送して京に至り，その国の使を遣わして入貢するに値(あ)い，其の事を白(もう)せしがため，遂に皆遣ち還らしむ。

遣琉球国民才孤那等二十八人還国，人賜鈔五錠。初才孤那等駕舟河蘭埠採硫黄，於海洋遇大風，飄至小琉球界。取水被殺者八人，余得脱。又遇風飄至恵州海豊。為邏卒所獲，言語不通，以為倭人。転送至京，値其国遣使入貢，為白其事，遂皆遣還。

この史料には，「琉球国」の人びとが，「河蘭埠」という場所から船に乗りこんで「海洋」に乗りだして硫黄を採取しようとしたが，風にあおられて「小琉球」に漂着し，さらに広東の恵州府海豊県に再漂着したことが記録されている。ここにみえる「琉球国」と「小琉球」については，この記事が明皇帝と琉球の三山王権との間で朝貢・貿易関係が結ばれてすでに20年程が経過している時期のものなので，前者が沖縄を指し，後者が台湾を指すと考えてほぼまちがいないであろう［曹1992：24，大田2009：210-212］。このような前提にもとづけば，出航地とされている「河蘭埠」は沖縄地域のどこかに比定されることになる。

この「河蘭埠」について，小葉田淳は，「河は或は阿の誤で，阿は伊・永の訛であり，伊蘭埠は永良部であろう」と推定している。ではこの「永良部」が現在のどこにあたるのかという点については，その用字からみて，小葉田は奄美群島の「沖永良部（おきのえらぶ）」島を想定しているのかもしれないが，明確な言及はない［小葉田1968:277］。そこで，あらためて現在の地名にもとづく範囲でその候補地を探すと，沖縄地域で小葉田のいう「永良部」に該当しそうな地名としては，前記の「沖永良部」島(3)以外に，音が近いものとして宮古諸島の「伊良部（いらぶ）」島がある。得能壽美は，近世の編纂史料を積極的に利用しつつ，宮古島の与那覇勢頭豊見親による1390年の中山入貢の画期性を評価しているが［得能2010:245-247］，だからといって，その直後の1392年に明朝において「伊良部」島の才孤那たちが即座に「琉球国民」と認知されたか，あるいは彼らがそのように自認していたかは疑問であり，小葉田のいう「永良部」を宮古諸島の「伊良部」島に比定することはやはり無理があろう。では，前者の「沖永良部」島の可能性はどうであろうか。

この問題に関して，まず注目したい史料に，鎌倉期に薩摩国河辺郡の地頭代官兼郡司として九州に下向した得宗北条氏被官の千竈氏が1306（嘉元4）年に作成した，財産相続にかかわる処分状・譲状がある。これらの文書には，同氏の本貫地の尾張国千竈郷や根拠地の河辺郡の所領以外に，薩南諸島から奄美諸島にまたがる島じまが相続の対象として書きあげられている。この文書中にみえる島じまが現在のどの島にあたるかを詳細に検討することにより，文書が作成された14世紀初頭の「日本国」の西の境界の状況を考察した村井章介は，その境界が現在の徳之島あたりにまで拡大していたと結論づけている［村井1997：122］。こののち1333年に北条氏が実権を握る鎌倉幕府が滅亡すると，千竈氏の勢力も弱体化し，かわって島じまの地頭職を握る島津氏が西の境界で勢力を回復し

た。そして，1363 年の島津貞久譲状になると相続対象の島じまに「此外五嶋」とあり，村井は，ここには奄美大島・喜界島・徳之島が含まれることは確実で，さらに沖永良部島・与論島が加わる可能性が高いとし，さらにこののち，1420 年代に琉球が中山王権によって統一されると，その版図が奄美方面に拡大し 15 世紀半ばには吐噶喇列島あたりが琉球と薩摩（日本）の境界になったとする［村井 2019：84-85］。

以上のような村井章介の研究成果にもとづけば，問題の『明実録』の 1392 年の「琉球国民」の出航地を「沖永良部」島と想定した場合，その島が当時，薩摩（日本）の勢力範囲にあったのか，それとも琉球の側にあったのか，微妙な時期である。ただ，そもそも，村井も中世の国境を「交易の盛衰によって伸び縮みし，しかもそれ自体がぼんやりとしたひろがりであるような，ソフトなものだった」と評価するように［村井 1997：132］，島津氏の譲状にみえる島じまの利権が，明確に切り分けられて支配される「土地」に付随する比較的安定的な利権ではなく，その海域における刻々と状況変化する「交易」に関わる流動的なそれである可能性が高い点を勘案すると，排他性の弱い「ぼんやりとした」境界地域にあった 14 世紀末の「沖永良部」島に「琉球国民」が入り込んでいたとしても，とくに問題はないように思われる。このように考えてくると，「沖永良部」島は，小葉田のいう 14 世紀末の「永良部」の有力な候補地となりそうである。(4)

これにたいして，伊波普猷は，三山の統一過程を考察するなかで，上述の『明実録』の記事を典拠とした，1719（康熙 58）年の冊封使徐葆光の『中山伝信録』（1721 年成書）巻 3・中山世系・察度・洪武 25 年条の

> 是より先，国人才孤独那等二十八人，硫黄を河蘭埠に採らんとし，風に遇いて恵州の海豊に飄う。邏卒の獲うる所となるに，語言通ぜずして，以て倭人となし，送りて京に至る。是に至りて，貢使のその事を白せしがため，太祖皆遣ち帰す。

> 先是，国人才孤那等二十八人，採硫黄于河蘭埠，遇風飄恵州海豊。為邏卒所獲，語言不通，以為倭人，送至京。至是，貢使為白其事。太祖皆遣帰。

という記事を紹介しつつ，ここにみえる「才孤那」という人名が尚巴志の権力基盤であった沖縄島南東部の佐敷地域の地名と関連している可能性を指摘している(5)［伊波 1974：146-148］。この伊波説にもとづけば，才孤那たちが船出した「河蘭埠」が沖縄島内部の地名である可能性も出てくる。しかし，この『中山伝信録』の記事では，「硫黄を河蘭埠に採らんとするに」と，硫黄の採鉱地が河蘭埠であったとしているが，その典拠となった『明実録』の記録では「舟を河蘭埠に駕り，硫黄を採らんとし」とあり，河蘭埠はあくまでも出港地であり硫黄の採鉱地ではない。伊波が利用した史料のこのような不正確さを考えると，彼が推測する才孤那と佐敷の関係についてはその当否を判断できないものの，河蘭埠の位置についてはすくなくとも伊波説からは説明できないであろう。

いずれにしろ現時点で，小葉田の主張する「河蘭埠」＝「永良部」説についてもその説を史料的に確証することはできないが，上述のように「琉球国民」の「才孤那」たちが船出した「河蘭埠」が沖縄島あるいはその周辺の島じまの地名であった可能性はやはり高いと思われる。そこでとりあ

えず本稿では，小葉田説に依拠したうえで，「河蘭埠」＝「沖永良部」島と仮定して，以下の論を進めていきたい。なお，「埠」の字義がそもそも「船着場」「港町」であることを考慮すると，今後さらにこの地名の比定を進めていくにあたって，「河蘭埠」が「河蘭」という名の「埠」＝港津という可能性も含めて検討する必要もあるかもしれない。

では，この「才孤那」たち36人が海を越えて硫黄を採るために向かおうとした目的地は，どこであろうか。この点に関して小葉田淳は，「この硫黄採集地は私は台湾台北州北投の硫黄鉱区であると信じている」としており［小葉田1976:194］，この見解にはおそらく，小葉田が台北帝国大学で教鞭を執り，現地を知悉している経験がおおきく影響しているのであろう。なお，『台湾省通志稿 巻4・経済志鉱業篇』第4章・硫黄鉱業の項では，台湾において交易対象となりうる硫黄産出地は，北部の大屯火山群七星山区（上述の北投鉱区一帯）のみであるとされている［台湾省文献委員会編1960：182］。とすれば，この才孤那たちの目的地を小葉田の説くように台湾としてよいのであろうか。つぎに，この問題に関して注目される史料やデータのいくつかを紹介しながら，私見を述べてみたい。

まず私が注目したいのは，李時珍『本草綱目』（1596年刊）巻11・石部5・石硫黄の項に引用されている朱権（朱元璋の第17子，1378-1448）の本草書『庚辛玉冊』の以下のような佚文である。

> 硫黄に二種有り。石硫黄は南海琉球の山中に生ず。土硫黄は広南に生ず。之を嚼（か）むに聲無き者を以て佳となす。舶上する倭硫黄もまた佳なり。今人消石と用配し烽燧・烟火を作る。軍中の要物たり。

> 硫黄有二種。石硫黄，生南海琉球山中。土硫黄，生於広南。以嚼之無聲者為佳。舶上倭硫黄亦佳。今人用配硝石作烽燧煙火。為軍中要物。

この『庚辛玉冊』の具体的な成書年次は不明であるが，朱権の生没年からみて，15世紀前半の著作であることはまちがいないであろう。とすれば，この時期にはすでに「琉球」は沖縄の呼称としてほぼ固定されていると考えられるので，朱権は沖縄・広南（広東・広西）・日本を当時の中国で利用された硫黄のおもな産地と認知していたことがわかる。そして，才孤那たちの漂流事件のすこしのちに成立した本書に「小琉球」＝台湾がみえない点は重視されるべきであろう。つまり，14世紀後半～15世紀前半の明代前期においては，台湾産の硫黄があまり交易されていなかったため，『庚辛玉冊』でも特段の言及がない可能性が考えられるのである。

つぎに100年程くだって，1556年に琉球経由で来日した明の使節鄭舜功の『日本一鑑』（1565年頃成書）「蒼海津鑑」の項には，台湾―琉球―薩摩間の諸島嶼の絵図が収載されており，そこでは台湾の鶏籠山と琉球の鳥島（硫黄鳥島）の頂上に噴気が描かれている。また，同書の本文中では，薩摩の硫黄島（絶島新編・巻2・島），鳥島（桴海図経・巻1・万里長歌）などでの硫黄の産出が記録されるとともに，「硫黄〈出硫黄，筑紫等島，大小琉球各産之〉」（窮河話海・巻2・珍宝附言土産），「按硫黄之山，非特一処，小東・日本皆有之」（桴海図経・巻1・万里長歌）というように，薩摩の硫黄島・琉球の硫黄鳥島とならんで「小琉球」「小東」＝台湾でも硫黄が産出していたことが述べられている。なお，曹永和によれば，『日本一鑑』が編まれたのとほぼ同じ時期の万暦初年（1573年）

頃の台湾北部の雞籠・淡水には，毎年4・5隻あるいは7・8隻の中国商船が来航して，金と硫黄の交易をおこなっていたという［曹1979：39］。

さらに半世紀程くだった明末の張燮『東西洋考』（1617年刊）巻5・東洋列国考東番考附・鶏籠淡水条の「形勝」の項では，「璜山＜琉璜気，毎作火光＞」とあり，たしかに明末の台湾北部においても硫黄の生成が認識されている。ただ，同書・鶏籠淡水条の「物産」「交易」の項では，その硫黄の採掘・取引などについてはふれられていない。

また，同じく17世紀前半に台湾北部の淡水河口部を占拠した（1626-1638）スペインは，その地域で採掘した硫黄を福建商船などとの交易品としており，ついで台湾を根拠地とした（1624-1661）オランダも，同地域の硫黄を中国や東南アジアの戦乱地域に輸出していた。とはいえ，彼らの台湾における貿易の主軸はあくまでも，大陸・日本・オランダ間での銀と絹製品の貿易であり，硫黄はあくまでも副次的な貿易品であった［台湾省文献委員会編1960：190，台湾省文献委員会編1977：93・111-112，曹1979：35-36］。このオランダ占拠時期に中国商人が台湾北部で交易した硫黄の量として，『バタビア城日誌』の1640・1642・1644年などの記録には，約60t～150t程のデータがみえる。［曹1979：41］。このように，17世紀前半のヨーロッパ勢力に関わる史料からは，台湾北部で大規模な硫黄の採掘がおこなわれていた状況がみてとれる。しかし，このような状況はあくまでも，16世紀以来のヨーロッパ人のアジア来航を起爆剤として新旧さまざまな火器の使用がアジア各地でおおきく拡大し［Sun 2006：2-3］，それにともなって火薬原料としての硫黄の需要も急激に増加していたと推定される17世紀前半の特異な状況と考えるべきであり，このような台湾での硫黄の採掘・交易の活況を15世紀以前にさかのぼらせることはできないであろう。

以上のような台湾北部における硫黄の採掘・交易史の概略を勘案すると，すくなくとも1392年の『明実録』の記事の時点では，台湾での硫黄の採掘量はおそらく沖縄や九州地域での量に比べてあまり目立たない程度のものでしかなかったと考えられる。とすれば，その時期に，小葉田淳が主張するような，沖縄島周辺地域からはるばる台湾北部まで海を渡り，そこで硫黄を採鉱・交易しようとするような人びとの活動が存在していたとは考え難い。この点に関わって，問題の『明実録』の記事をもういちどみなおすと，「琉球国」の才孤那たちが漂着したのが「小琉球」の領域であったとされている点は重要である。1370年代以降，明皇帝と沖縄の諸王権との間で政治的な関係が形成されたことを契機に，「琉球」という呼称はしだいに沖縄のみを指すようになり，ときに沖縄は「大琉球」とも呼ばれた。このいっぽうで台湾が「琉球」と呼ばれることはほぼなくなり，場合によっては「大琉球」の沖縄と対比して「小琉球」とも呼ばれた。このような「琉球」という呼称の歴史的な変遷は現在，大方の認めるところであろう［曹1992，大田2009］。この通説的な理解を前提とすれば，1392年時点での「琉球国」とは「大琉球」すなわち沖縄地域を指し，そこの住人たちが「小琉球」すなわち台湾に漂着したと考えるのが妥当である。そうするとやはり，「小琉球」＝台湾は「琉球国」＝沖縄の住人である才孤那たちの本来の目的地ではなく，あくまでも慮外に漂着してしまった土地であり，彼らが「海洋」に乗り出して硫黄を採鉱しようとした本来の目的地は，沖縄島近辺に求めなければならないであろう。とすればそれは，同地域でただひとつの硫黄産地である火山島の硫黄鳥島であった可能性がきわめて高いということになろう[(6)]。このような想定が認められるとすれば，沖縄地域唯一の硫黄産地である硫黄鳥島は，本稿が「河蘭埠」の有力な候補地と考えた沖永

良部島の北北西約60kmに位置しているので，『明実録』にみえる才孤那たちは，硫黄を採るために沖永良部島から船で硫黄鳥島に向かう途中で漂流した，という可能性がきわめて高いのではなかろうか。なお，先述のように，現在確認されている硫黄鳥島での硫黄の採掘を記録した最古の史料は，1471年成書の申叔舟『海東諸国紀』である。もし，このような『明実録』の1392年の記事に関する推論が認められるとすれば，硫黄鳥島での硫黄の採掘とその交易は史料的に80年ほどさかのぼることになる。

(2)『島夷誌略』にみえる「琉球」の硫黄記事

注目したいふたつめの中国史料は『島夷誌略』である。この書物は，元末の1350年頃に江西南昌出身の汪大淵によって著された地理書であり，著者自身が巡歴した際の見聞にもとづいて，南海諸国の地理・物産・風俗などが紹介されている。そしてそのなかに，以下のような「流球」の情報がみえる。

> 地勢は盤穹にして，林木は合抱なり。山は翠麓と曰い，重曼と曰い，斧頭と曰い，大峙と曰う。其の峙山は極めて高峻にして，彭湖より之を望むに甚だ近し。余此の山に登りて則ち海潮の消長を観るに，夜半にして則ち暘谷の出るを望み，紅光天を燭(て)らし，山頂之が為に倶に明るし。土は潤い田は沃にして稼穡に宜し。気候は漸暖にして，俗は彭湖と差(たが)い異なる。水に舟楫なく，筏を以て之を済る。男子・婦人は拳（巻）髪にして，花布を以て衫と為す。海水を煮て塩を為(つく)り，蔗漿を醸して酒を為る。番主酋長の尊を知り，父子骨肉の義有り。他国の人倘(も)し犯す所有らば，則ち其の肉を生きながらに割き以て之を啖らい，其の頭を取りて木竿に懸く。地は沙金・黄荳・麥子・硫黄・黄蠟・鹿・豹・麂皮を産す。貿易の貨には，土珠・瑪瑙・金珠・粗碗・処州の磁器の属(たぐい)を用う。海外の諸国，蓋し此れ由り始る。

> 地勢盤穹，林木合抱。山曰翠麓，曰重曼，曰斧頭，曰大峙。其峙山極高峻，自彭湖望之甚近。余登此山則観海潮之消長，夜半則望暘谷之出，紅光燭天，山頂為之倶明。土潤田沃宜稼穡。気候漸暖，俗与彭湖差異。水無舟楫，以筏済之。男子婦人拳（巻）髪，以花布為衫。煮海水為塩，醸蔗漿為酒。知番主酋長之尊，有父子骨肉之義。他国之人倘有所犯，則生割其肉以啖之，取其頭懸木竿。地産沙金・黄荳・麥子・硫黄・黄蠟・鹿・豹・麂皮。貿易之貨，用土珠・瑪瑙・金珠・粗碗・処州磁器之属。海外諸国蓋由此始。

『隋書』のなかにはじめて「瑠求（琉球）」が登場（巻81・瑠求国伝，巻3・煬帝紀上，巻24・食貨志，巻64・陳稜伝など）して以降，先述のように明と三山の王たちとの朝貢・貿易関係が形成された14世紀後半までの間，ここでとりあげる『島夷誌略』も含めてさまざまな中国史料に「琉球」に関する記述がみられる。これまでの研究史において，それらの中国諸史料にみえる「琉球」がどこを指しているのか，台湾説，沖縄説，台湾・沖縄折衷説などがくりかえし主張されてきた。そして現在のところ，明代以前の「琉球」に関しては，台湾説が優勢なようである［山里1993，大田2009など］。とすれば，ここで注目する『島夷誌略』に記録されている「琉球」情報もやはり，台湾に関するもの

と理解されるかもしれない。

ただ，『島夷誌略』が著された14世紀半ばも含まれる宋・元期の中国における「琉球」認識を検討した大田由紀夫は，以下のような興味深い指摘をおこなっている。大田はまず，当該期の中国諸史料にみえる「琉球」についてはほぼ台湾を指すとみてまちがいないとする。しかしそのいっぽうで，当時の人びとの「琉球」認識はさほど明瞭なものではなく，そこにはかなりなユレやブレがみえるので,「琉球」＝台湾という等式がつねに成り立つというような確固たる認識を宋・元期に想定してしまうこともまた危険であると結論づけている［大田 2009：204-205］。そうすると，このような大田の見解による限り，明代以前の中国諸史料にみえる「琉球」の記述には，台湾以外の地域に関する認識・情報も含まれている可能性が残されているのである。

さらに，この大田論文においても傾聴すべき貴重な先行研究として参照されている曹永和の説に注目してみたい。曹はまず，研究史の現状として，『隋書』から『元史』までの史籍における「琉球」関係の記述が台湾を指していることはほぼ妥当で，このために台湾説をとる論者が比較的多いと述べる。ただ，1372年の明の洪武帝による琉球招諭を契機として，中国における「琉球」認識はそれまでの台湾中心の認識から沖縄中心のそれへと変化しており，この変化がスムーズに進んだ歴史的前提をあらためて検討する必要性を強調している。このような研究史の認識にもとづき曹は，明代以前の中国諸史料における「琉球」認識にふたつの認識が混同されて存在している点に注目する。そのふたつの認識とは，とりたてて特産品もなく，略奪を好み，中国からの商人の往来もないような野蛮な「琉球」と，福建や広東地方の商人が交易のために往来する「琉球」であり，前者が台湾を指し，後者が沖縄を指すという。このうちとくに後者の認識については，沖縄地域の集落・グスク遺跡における福建産陶磁の出土状況からみて，13世紀以降の宋・元期にはすでに沖縄島や宮古・八重山地域に中国商船が来航し，交易がおこなわれていたという歴史的背景を想定する。そして，この後者の認識こそが，明の洪武帝による琉球招諭を契機に「琉球」＝沖縄という認識に転換・収斂していく歴史的前提となったと主張する［曹 1992：19-20］。

曹永和のこのような「琉球」認識の史的変化の図式を参照するとやはり，本稿が注目する『島夷誌略』の「琉球」情報のなかにも，台湾以外に関する認識・情報が含まれている可能性を十分に考えうるのではなかろうか。なお，この点については，同じく台湾の近世・近代史研究者である周婉窈も，『島夷誌略』にみえる地理情報からすればその「琉球」が台湾である可能性が高いが，そこに記されている「以花布為衫」「煮海水為塩」「釀蔗漿為酒」などの風俗については現在知られている台湾西南沿岸部の土着文化と符合しないので，そこに記されている「琉球」が確実に台湾を指すと結論づけるには問題があると述べている［周 2007：103］。

つぎに，『島夷誌略』にみえる「琉球」情報に関説した，いくつかの考古学研究者の見解をとりあげてみたい。たとえば台湾の陶磁史研究者である陳信雄は，『島夷誌略』に交易品のひとつとしてみえる「処州磁器」は龍泉窯系青磁を指すとし，台湾における元代のそれらの出土がきわめて少量であるのに対して，沖縄では各地のグスク跡などから宋～明代のものが器種・数量ともに豊富に出土している点に注目し，同書の「琉球」が沖縄を指す可能性を指摘している［陳信雄 1992：120-123/1993：330-332］。なお，森達也も，『島夷誌略』にみえる「粗碗」は福建産の粗製磁器であり，「処州磁器」は龍泉窯青磁であると指摘しているが，「琉球」の比定地に関してはとくに言及していない［森達也

2019：102-103]。

また，同じく台湾の陶磁史研究者の王淑津は，台湾北部から出土する宋・元・明代の中国陶磁が中国―琉球間の貿易ルートの展開に付随する遺物であるとするこれまでの有力な見解をふまえつつ，新たに確認された陶磁史料がとくに14世紀第2四半期～第3四半期頃にまで年代がさかのぼることを指摘する。そして，まさにこの年代に編まれた『島夷誌略』に「琉球」が記録されていることにあらためて注目し，その「琉球」が台湾を指すかどうかについては結論を避けつつも，台湾北岸の河口と沿海地区で出土している青磁に関して，類型が増加して年代もさかのぼったり，あるいは出土した陶磁の年代にある種の連続性が看取されたりする状況は，将来的にさらに一歩検討を進めるに値する問題であると述べている［王：2009：33-34］。はなはだ微妙な論法ではあるが，あえて本稿の主張にひきつけて解釈すれば，王は『島夷誌略』の「琉球」に台湾以外の可能性を見通しているのではなかろうか。

以上のような文献史学・考古学の先行研究をふまえて，本稿では，「琉球」の認識が沖縄と台湾の間で微妙に揺れ動いていた元末の1350年頃に成立した『島夷誌略』の「琉球」情報に，台湾以外の情報，すなわち沖縄地域に関する情報が紛れこんでいる可能性を指摘してみたい。もしこのような可能性が認められるのであれば，その「琉球」の特産物のひとつにあげられている「硫黄」もまた，沖縄地域で産出された硫黄とみなしうる余地があるのではなかろうか。ただ，『島夷誌略』の琉球記事には著者汪大淵の実見が含まれているので，そこにみえる硫黄の産出情報を強引に沖縄に結びつけてしまうことにも，若干の躊躇を覚える。とはいえ，先述の15世紀前半の『庚辛玉冊』で代表的な硫黄産地のひとつとして琉球＝沖縄地域がみえる点や，16世紀半ばの『日本一鑑』に薩摩硫黄島・硫黄鳥島・台湾島北部での硫黄の産出が記録されている点などからみて，14世紀半ばの中国においてすでに，南西諸島から台湾にかけて点在する複数の島じまにおける硫黄の産出が認識されており，それらの島じまの硫黄が交易品として中国にもたらされていた可能性はかなり高い。そうすると，台湾と沖縄の間を揺れ動く当時の「琉球」認識の隙間に，沖縄の硫黄情報が滑りこんでくる可能性をまったく否定しさることもできないであろう。

このような本稿の推測が認められるとすれば，第2章第2節で述べた，1370年代に明と琉球の諸王権との間で朝貢・貿易関係が形成されたときにはすでに沖縄地域における硫黄の流通システムが確立していたのではないかという論点についても，ひとつの回答がえられるのではなかろうか。すなわち，そのような硫黄の流通システムに乗って交易されていた沖縄地域の硫黄に関する情報が，1350年頃に著された『島夷誌略』のなかに混入している可能性があると考えたいのである。(7)

以上，本章での考察を通じて，すでに1392年の時点で沖縄の硫黄鳥島での硫黄の採掘・交易が沖縄島周辺の人びとによっておこなわれていた可能性や，さらにさかのぼって1350年頃の中国において沖縄地域での硫黄の産出・交易が認知されていた可能性を指摘した。しかし，くりかえしになるが，15世紀後半の『海東諸国紀』以前に硫黄鳥島で硫黄の採掘がおこなわれていたことを直接証明するような文字史料はみあたらないし，ましてや明と三山との朝貢・貿易関係成立以前における沖縄地域での硫黄交易を明記する文字史料も残されていない。このような，関連する文字史料がほとんどみいだされない1370年代以前の「南島路」の実態やそこでの硫黄交易の状況を考察するにあ

たって，きわめて有用なデータを提供してくれる可能性が残されているのが南西諸島地域や台湾での中国陶磁の出土情報であることは，異存のないところであろう。そこで次章においては，その分野に関する考古学研究の成果を参照しながら，「南島路」やそこでの硫黄交易の問題を考えてみたい。

❹……中国陶磁の流通からみた「南島路」と硫黄交易

本章では，南西諸島・台湾出土の中国陶磁に関するおもな研究成果を私なりに整理し，そこからみえてくる「南島路」や硫黄交易の問題と関わる新たな論点や課題などを提示してみたい。

（1）14 世紀半ばまでの南西諸島における中国陶磁の流れ

これまでの考古学の諸成果を参照すると，南西諸島における中国陶磁の流通に関する大きな画期は 14 世紀半ばにあると考えられる。

まず，この 14 世紀半ばの画期以前の中国陶磁の流通状況に関して，通説的な理解の土台となっているのは，亀井明徳の研究であろう。亀井は，12 ～ 14 世紀の沖縄地域における中国陶磁の入手ルートについてつぎのような見通しを述べている。すなわち，12 世紀半ば～ 13 世紀の時期については，中国陶磁が先島諸島までの範囲でほぼ普遍的に出土しているものの，つぎの 14 世紀と比べると非常に少なく，これらは九州本土と南西諸島を直接ないし中継して結ぶ交易船により北から南に運ばれたと想定している。14 世紀前半代になると，沖縄各地の有力者のなかに中国との交易によって陶磁器を入手していたものたちがいる可能性もあるが，亀井の研究時点（1990 年代）で判明している程度の中国陶磁を出土する遺跡の数やその陶磁の出土量では琉球と中国との直接的な交易が存在していたことを証明することは困難であり，この時期の沖縄地域の中国陶磁も基本的に九州から南下するかたちでもたらされたとする。その後，元末の 14 世紀半ば前後になると出土量が急激に増加することから，この時期に沖縄と中国の間に直接的な陶磁貿易ルートが形成されたと想定し，このような交流が 1370 年代に明と琉球の朝貢・貿易関係が開始される前身形態となったと考えている［亀井 1993：29-30，1997：42］。

また，亀井がおもに検討した時期以前の 11 世紀後半～ 12 世紀前半頃に琉球列島にひろく流入した白磁を主とする中国陶磁について，池田榮史は，それらが日宋貿易によって中国から日本（九州）を経由してもちこまれたとする［池田 2019：19］。池田が指摘するこのような中国陶磁の流れはまさに，亀井がのちの時期について指摘した上述のような北から南へと向かう流れと同じである。

以上のように，11 世紀後半～ 14 世紀前半の南西諸島については，広範囲に中国陶磁が出土するものの，遺跡数や個体数は 14 世紀後半以降に比べるとかなり少ないという状況がうかがえる。ここからはやはり，南西諸島の中国陶磁の流通においてきわめて重要な画期が 14 世紀半ば頃にあったといえるであろう。ただ，この 14 世紀半ば頃の大きな画期に比べれば，その変化の規模や質において見劣りはするものの，本稿の素材である硫黄交易ともかかわってとくに注目してみたいのが，13 世紀半ば頃の画期である。この画期について池田榮史は，南西諸島に中国陶磁をもたらす交易システムとしては，11 世紀後半以降，九州の博多を中心として北から南にそれが流れていくシステムが続

いていたが，13世紀後半になると福建から琉球列島へと至る新たな交易システムが加わったと指摘している［池田2019：34］。つまり，南西諸島におけるそれまでの北から南へというメイン・交易システム（メイン・ルート）のなかに，南から北へというサブ・交易システム（サブ・ルート）が新たに形成されたわけである。

（2）13世紀後半以降の新交易ルートの形成

13世紀後半以降の南西諸島において新たな交易ルートが形成されたという想定の重要な根拠となるのが，13世紀後半～14世紀前半に福建省の閩江流域で生産された，今帰仁タイプ（連江県浦口窯）およびビロースクタイプⅠ・Ⅱ類（福州市閩清県閩清窯）と呼ばれる粗製の白磁（一部青磁とされるものもある）である［森達也2019:103］。これらの福建産磁器は九州以北ではほとんど出土しないが，琉球列島では普遍的に出土する。また，琉球列島の内部では，先島諸島・沖縄諸島では比較的まとまって検出されるが，奄美諸島での出土は少ない，という地域的な偏差がみられる［宮城・新里2009，新里2018：82］。木下尚子は，このような特徴的な出土状況に注目し，13世紀後半をさかいに，それまでに形成されていた国内流通圏とは別に，沖縄諸島から先島諸島にかけて新たな流通圏が形成され，今帰仁タイプおよびビロースクタイプⅠ・Ⅱ類の磁器は，後者の流通圏を通じて南中国から先島諸島を経由して琉球列島にもたらされたと想定している［木下2009:252-253, 2014:42-44］。また，田中克子は，13世紀前半までの南西諸島には北方の九州から中国陶磁が流入していたが，13世紀後半をさかいに，今帰仁タイプ，ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類という新たなタイプの磁器が福建から八重山・宮古諸島さらに沖縄諸島へと北上する交易ルートによって運ばれ，ほぼそれらの地域でのみ使用されたと推定している。ただ田中は，この福建から沖縄地域を北上するルートの最終目的地はあくまでも博多であったと考えている。［田中2009：139-140］。

宮城弘樹と新里亮人は，今帰仁タイプ・ビロースクタイプⅠ類が沖縄諸島から先島諸島にかけて運ばれ始めたことで，それまで基本的に日本側に貿易の拠点や主導権があり，そこを通じて中国陶磁が琉球列島にもたらされていた貿易システムが転換したと評価するとともに，琉球列島における中国との貿易が今帰仁タイプ・ビロースクタイプⅠ類の時期（13世紀後半～14世紀前半頃）に用意され，ビロースクタイプⅡ類の時期（14世紀前半～中頃）に安定的となり，ビロースクタイプⅢ類（14世紀中頃～15世紀初め）の時期に完成したという図式を提示している［宮城・新里2009：84］。さらに新里亮人は，琉球列島各地の在地集団が主導的に舶来供膳具類を入手する交易活動が展開した画期を13世紀中葉におくことができるとも指摘している［新里2018：83］。

このほか，森達也は，今帰仁タイプ・ビロースクタイプ白磁の琉球列島での出土状況をもって，福州から琉球列島を経て九州に北上する交易ルートが南宋代にひき続き元代にも存在した可能性や，その交易ルートが1372年の中山王察度による明への朝貢以前からすでに琉球・中国間の交易において使われていた可能性を指摘している［森達也2013：121-122］。また，瀬戸哲也は，それらの白磁の出土状況から，第1章で紹介した文献史学側から主張されている14世紀後半に一時的に活性化した肥後高瀬から琉球列島を経由して福建地域に至る「南島路」が，それ以前からすでに利用されていた可能性を指摘する［瀬戸2019：129-130］。

これらの考古学の諸成果からは，明と沖縄島の諸王権が朝貢・貿易関係で結ばれた14世紀後半以

降に比べればかなり細い流れではあるものの，13 世紀半ばを画期として，福建と琉球列島の間にヒトやモノの新たな流れが生まれたことがうかがえる。このことはつまり，13 世紀半ば以前のおもに北の九州方面から南下してくる人びとに，さらに南の福建方面から北上してくる中国の海商などが加わり，琉球列島の海域を動き回る人びとがいっそう増加・多様化したことを意味している。そして，とくに後者の福建方面から北上する人びとによって担われた新たな交易のシステムは，上述の複数の考古学研究でも指摘されているように，1370 年代に明と琉球の朝貢・貿易関係が比較的スムーズに形成されたことの歴史的前提となっていたと考えてほぼまちがいないであろう。そうすると，本稿の主題であるこの海域での硫黄交易に関しても，1370 年代に明と琉球諸王権との朝貢・貿易関係が開始された当初から「トン単位」の硫黄を継続的に明に送ることができたのは，それ以前にすでに確立されていたそのような新たな交易のシステムのなかに硫黄の交易システムが含まれていたためであると推定するが，この点については第 5 章であらためて検討してみたい。

（3）台湾での中国陶磁の出土状況

前節で紹介した 13 世紀後半以降の福建と琉球列島を結ぶ交易ルートに関して，そのルートのより具体的な実態をかいまみせてくれるのが，近年台湾で出土している中国陶磁とその考古学研究の成果である。本節では，その分野における中国・琉球間の交易ルートに関わる見解をすこし紹介しておきたい。

まず，王淑津と劉益昌は，台湾北部の淡水河河口部の大坌坑遺跡で出土した 11 世紀後半～ 14 世紀頃の中国陶磁を，日本をはじめとする周辺地域で出土した陶磁と比較しつつ分析することにより，交易品として運ばれたそれらの中国陶磁が同時期に日本に輸出されていた主要な陶磁の組成（博多遺跡群・持躰松遺跡・倉木崎海底遺跡・沖縄地域諸遺跡など）とほぼ一致することに注目する。そして，それらの中国陶磁から，14 世紀後半～ 15 世紀初期に明と琉球の朝貢・貿易ルートが確立する以前において，福建（福州・泉州）→琉球列島→九州という航路で私的な貿易がさかんにおこなわれていたことを推測している。ただ，大坌坑遺跡が所在する淡水河河口部での交易はそれほど大規模なものではなく，隣接する中国―琉球航路ととくに深い関係を有する陶磁貿易路線の停留地・経由地のひとつという程度の位置づけであったと考えている［王淑津・劉益昌 2010：47-58］。

また，森達也は，台湾北部で出土する中国陶磁が福州の港を発着する小形の沿海輸送船により国内輸送の延長程度の意識で台湾海峡を渡って台湾に運ばれたものではないかという想定をおこなうとともに，先島諸島の西表島で採集されている 13 世紀前半頃の景徳鎮窯青白磁梅瓶が，福建産の水注や瓶などの大形器種も出土している台湾北部からその島に運ばれたことを推測するなど，福建―琉球ルートの細部に関してややふみこんだ見解を述べている［森達也 2019：102-104］。

これらの見解による限り，台湾北部での中国陶磁の出土状況からみても，その貿易規模はさほど大きなものではないかもしれないが，14 世紀後半の明と琉球諸王権の朝貢・貿易関係が成立する以前にすでに，福建―（台湾北部）―琉球という交易ルートが形成されていた可能性はかなり高いといえよう。(8)

（4）倉木崎海底遺跡の性格

「南島路」の実態を考察するうえできわめて重要な素材のひとつが奄美大島の倉木崎海底遺跡であることは，異論のないところであろう。この遺跡は奄美大島南西部の宇検村に所在し，倉木鼻と呼ばれる半島と対岸の枝手久島との間に北西―南東方向に広がる狭い海峡部分の海底から，多数の中国陶磁片が発見されたことで，一躍注目された遺跡である。1995年に発見されたのち，予備調査も含めて3回の調査が実施され，それらの結果をまとめた発掘報告書が1999年に宇検村教育委員会から刊行されている（以下『報告書』と略称）。この『報告書』によれば，倉木崎海底遺跡からは，12世紀後半～13世紀前半の中国陶磁片2,326点が引き揚げられている［宇検村教育委員会編1999］。

倉木崎海底遺跡をめぐって検討を要する問題は多々あるが，最大の問題点はやはり，本稿の主題である「南島路」の実態ともきわめて深くかかわる，この遺跡から採集された中国陶磁を積載していたであろう交易船がたどった，あるいはたどろうとしていた航路の問題である。本稿では，とくにこの問題に焦点を絞って私見を述べてみたい。ただ，倉木崎海底遺跡に関説した論著は膨大な数にのぼるので，本稿でそれらを全面的に整理し，逐一私見を付していくことは無理である。そこで，上述の『報告書』および2014年の九州国立博物館による追加調査の結果も取り込だ2017年刊行の『宇検村誌 自然・通史編』（以下『村誌』と略称）の記述を中心に，他の若干の論考を補いつつ，私見を述べていきたい。

倉木崎海底遺跡から採集された2,300余片の中国陶磁片は，『報告書』にひき続き『村誌』でも12世紀後半～13世紀前半のものと推定されている［宇検村誌編纂委員会編2017：通史編Ⅰ第三章第一節・230］。また，森達也はこの年代をさらに絞りこんで12世紀末～13世紀初頭としている［森達也2013：110，2019：106］。いずれにしろ，それらの中国陶磁片の年代が1200年前後に集中している点からみて，『報告書』『村誌』および従来の諸研究のように，その頃に倉木崎に来航した1隻の交易船の積荷と考えて問題はないであろう。また，これらの中国陶磁片と同じ種類の遺物は，奄美大島の北部地域では出土しているものの，宇検村周辺の遺跡でほとんど発見されていないことから［宇検村誌編纂委員会編2017：通史編Ⅰ第三章第一節・230，第二節・236/240/257］，すくなくとも問題の交易船がこの宇検村地域を目的地としていた可能性は低いであろう。とすればやはり，海難による意図しないかたちでの倉木崎への来航であったと考えられる。

つぎに，それらの中国陶磁片の組み合わせをみると，『報告書』では，龍泉窯系の青磁碗・皿が1,173点（うち1,160点が碗），同安窯系の青磁が210点，景徳鎮窯系の青白磁が20点，福建系の白磁の碗・壺・皿が189点，褐釉陶器の甕・壺が716点（うち壺が369点），泉州系の黄釉盤が14点，建窯系の黒釉天目碗が1点などとされており［宇検村教育委員会編1999］，『村誌』でもとくにおおきなデータの訂正などはないようである。また，『報告書』では，このような陶磁器の組み合わせの特徴として，多様な陶磁器のセットがみられること，ほとんどが博多遺跡群からの出土品と共通していること，鹿児島県持躰松遺跡の出土品とも類似していること，奢侈品というよりは日常生活用品が主体であることなどが指摘されているが［宇検村教育委員会編1999］，これらの点についても『村誌』での変更はとくにみられない。なお，森達也の磁器のみに関する独自な集計では，龍泉窯青磁が全体の約4分の3，福建産磁器（倣龍泉窯青磁〈莆田窯〉・白磁〈閩清窯？〉・黒釉碗）が約4分

の1，景徳鎮青白磁は微量という産地比率が抽出され，このような比率がほぼ同時期の中国陶磁が大量に出土した福岡博多遺跡群祇園駅出入口1号土坑や鹿児島持躰松遺跡Ⅱ期の比率と近似している点や，新安沈船のように中国各地の多様な磁器をともなっていないという点に注目している［森達也 2013：110，2015：224，2019：106］。

これらの中国陶磁片の組み合わせに関する特徴は，その中国陶磁を積荷としていた交易船の航路を探るためのきわめて有力な材料とされ，以下のような航路の可能性が提示されている。

まず，手塚直樹は『村誌』において，中国陶磁片の碗類と皿類の比率が本州地域の消費地遺跡と同じ傾向を示している点や，九州地域とくに博多で多数発見されている大型褐釉陶器類が含まれている点に注目し，倉木崎の交易船は本来，中国から九州に向かっていたと推定している［宇検村誌編纂委員会編 2017：通史編Ⅰ第三章第二節・256/258］。

また，金沢陽は同じく『村誌』のなかで，碗・皿・壺といった生活用器皿を中心として，ごく少量の経塚埋納品などに用いられる小壺・合子や喫茶用の建盞天目碗といった高級器種が加わるという組成が，同時期の博多遺跡群や持躰松遺跡をはじめとする国内の消費地遺跡のそれに合致する点などに注目し，福建と九州（博多）を最終目的地として，奄美・沖縄諸島で比較的小規模な交易をおこなう航路を想定しているが，そのような航路は倉木崎海底遺跡の時期にはいまだ主要幹線ではなかったとも指摘している［宇検村誌編纂委員会編 2017：通史編Ⅰ第三章第三節・295/303］。なお，金沢は，沖縄県久米島のナカノ浜沖海底遺跡に倉木崎と同様な中国陶磁片が散布することから[(9)]，この島も福建と九州を結ぶ航路の経由地であったと推定している［宇検村誌編纂委員会編 2017：通史編Ⅰ第三章第三節・302-303］。

このほか，森達也は，寧波（明州）を出港する貿易船には，おもな輸出陶磁である福建陶磁・龍泉窯青磁・景徳鎮窯陶磁のほかに中国各地の産地の製品が少しずつ積載されていた可能性が高く，これに対して，福州で荷積みされた貿易船には，その地に集積されていた閩江流域およびその周辺で生産された福建磁器・龍泉窯青磁・景徳鎮窯磁器がおもに積み込まれ，寧波のように中国各地の陶磁器が積み込まれることはあまりなかったとし，倉木崎海底遺跡の中国陶磁片はまさに後者の積荷の組成と一致すると指摘する。そして森はこの点を重視して，それらを積荷として倉木崎に来航した交易船の出航地は福州である可能性がきわめて高く，本来の航路も福州→明州→九州もしくは福州→琉球列島→九州であったと推定する［森達也 2013：113，2019：106］。

倉木崎海底遺跡の性格に関する以上のような考古学研究者たちの見解には，私のような日宋貿易史を専門とする文献史学研究者にとっては多くの参照すべき貴重な提言が含まれている。しかし，そのいっぽうで，その解釈や説明に疑問を感じる点もいくつかある。そこで以下，そのような疑問点を提示しながら，倉木崎海底遺跡の性格に関する私見を述べてみたい。

私がまず注目したいのは，海底から採集されている中国陶磁片の2,300余片という少なさである。この数字は一見，かなり大量の荷物のようにも思われるが，あくまでも「破片」の数であり，「個体」の数ではない。たとえば新安沈船の現存する積荷の量と比べると，まったく比較にならない少なさである[(10)]。ただ，この遺物としての中国陶磁片の少なさという点については，海難に遭遇した船が積荷の一部を投棄することで船体を浮上させ，座礁から脱出して沈没を免れたためではないか，という推定がおこなわれている［宇検村誌編纂委員会編 2017：通史編Ⅰ第三章第二節・257］。しかし，

仮に日宋貿易で使用されていたジャンク船が刎荷（積荷の海中投棄）をして船体を浮上させようとした場合，現在引き揚げられている新安沈船の膨大な積荷の事例や，船の安定を保つための底荷だけで50t程の重しを搭載した新安沈船と同規模の復元「浪華丸」の事例［山内2009：6-7］などをみると，全長30m前後で喫水が3～4m程度と推定される当時の貿易船［渡邊2015：23，大庭2019：247-248］が船体を浮揚させるには相当量の刎荷が必要なはずであり，2,300片余の陶磁片の重量ではまったく意味をなさないのではなかろうか（もちろん，日宋貿易の代表的な輸入品であった織物・香薬・南方木材・書籍などのさまざまな有機物も投下した可能性は否定できないが）。また，万が一刎荷をおこなったとしたら，さらに多種・多量な遺物が海底に散布されたはずであるが，先述のように現在のところ海底からは2,300余片の陶磁片以外のものはみつかっていないのである。このように推測を重ねていくと，積荷の海中投棄による座礁からの脱出，という上述の想定は成立し難いといわざるをえない。

このような，刎荷の結果として浅い海峡域を脱出したという想定の他にも，その場所で投棄された中国陶磁は積荷のごく一部であり，船体や他の大部分の積荷は水深の深い海峡部西側の東シナ海や東側の焼内湾に沈んだという想定も「論理的」には可能であろうが，その当否については現在のところ確かめようがない。そこで私は，上述のような交易船としては少量の中国陶磁片にあらためて注目し，倉木崎に来航したと推定される交易船が博多などの九州地域で中国陶磁を仕入れた日本列島内を活動範囲とする小型の交易船であったからこそ，そのような中国陶磁の残存状況となったと想定してみたい。この場合であれば，仮に上述のように刎荷をおこなえばわずかなりとも船体が浮揚し，現地の水深1～4m程度の浅い海峡部であっても脱出できた可能性があるのではなかろうか。

つぎに注目したい点は，多くの考古学研究者が指摘する，倉木崎海底遺跡の中国陶磁片の組成が博多遺跡群や持躰松遺跡などの九州地域の交易関連遺跡から出土した中国陶磁のそれと共通するという点である。この組成の共通性という点が，1200年前後にすでに「南島路」が存在し，倉木崎に来航した交易船はその航路をたどって九州をめざして北上していた途中であった，という推定の重要な根拠のひとつとされていることは，先述の通りである。ただ，この陶磁器の組成の共通性という点に限ってあらためて考えてみれば，あくまでも「論理的」には，博多などの九州地域で中国陶磁を仕入れて南下した，日本列島内を活動範囲とする交易船の積荷であるからこそ，そのような組成の共通性がみられる，というヒト・モノの流れとしては真逆の解釈も可能なのではなかろうか。このような真逆の解釈は，さきに紹介した沖縄県久米島のナカノ浜沖に散布する倉木崎と同様の中国陶磁片についても，可能かもしれない。なお，報告書・村誌に掲載されているデータをみる限り，倉木崎の中国陶磁片のなかには，博多遺跡群で多数出土している，中国人交易関係者の名前や交易品運搬のグループを示す「綱」字などが墨書された陶磁，あるいは窯買いの陶磁を交易船に積み込んだことを推測させる融着して商品にならない陶磁などのデータがみられない。これらの点からも，すでに博多などの交易拠点で選別されたあとの陶磁器が積載されていた交易船である可能性をうかがえないであろうか。(11)

さらに注目したいのは，考古学研究者の多くが倉木崎海底遺跡の中国陶磁片を福建―琉球列島―九州という航路の証左と考えているために，文献史学研究者もおうおうにしてそのような見解に引

き付けられているように思われる点である。たしかに，これまで考古学は，文献史料には記録されていない多様な史実を明らかにし，歴史学研究におおきく貢献してきた。とはいえ，この倉木崎海底遺跡が属する南宋代の「南島路」を考えるにあたって，日宋・日元交流史研究を専門とする文献史学の榎本渉の，

> 日宋貿易に利用された日本側貿易港を示す百近くの事例の中で，薩摩入港商船の明確な事例がこれ〈1262 年，無関玄悟の明州→薩摩の帰国船…山内補〉のみであること（漂着船・正体不明の異国船も各一例ある）は，南九州―宋の航路は使用されたとしても，日宋交通路としてはサブルートだったことを示している。元末明初の動乱で博多―明州ルートが不安定になり，メインルートの一つとして肥後―薩摩―琉球―福建ルートが開拓された一三五〇～七〇年代とは，同列に考えない方が良いだろう。

という指摘［榎本 2010a：45］は，けっして無視できないであろう。榎本が検出した，日宋貿易で利用された貿易港の 100 近いデータのなかで，薩摩が利用された事例はわずか 1 例であり，しかもそれは明州を出航した事例なので，その貿易の時期における福建―琉球列島―九州航路の確実な事例は皆無ということになる。この点については，金沢陽が，福建―琉球列島―九州という航路は宋・元代の史料にみられず明代になって史料にあらわれると指摘し［宇検村誌編纂委員会編 2017：通史編Ⅰ第三章第三節・285］，森達也も，宋代の中国と日本を結ぶルートとして福州―寧波―博多と福州―琉球諸島―九州という両者の共存を推定するが，後者のルートの存在を示す文献史料はないと述べるように［森達也 2013：115］，考古学研究の側でも文献史料に記載されていないことを認めている。

たしかに，文献史料が作成される過程では，とくに珍しくもない日常的なできごとや事項などはおうおうにして記録から漏れていくが，それにしても，100 近い事例のなかに航海や交易に関わりそうな琉球列島の地名や人名などの現地情報らしきものがみあたらないという点からすればやはり，すくなくとも宋代における福建―琉球列島―九州航路の利用は疑問とせざるをえないのではなかろうか。ちなみに，考古学研究者の新里亮人は，13 世紀前半以前の琉球列島における中国産陶磁の出土状況が九州の一般的な遺跡と大差ないことは，博多を中心とする一極ラジアル型の陶磁貿易構造の反映であり，当該期の琉球列島は博多を中心とする商圏内に位置しつつ，奄美諸島がその窓口として機能していたと想定している。そしてさらに，倉木崎海底遺跡の中国陶磁片の組成が九州島と類似している点から，北からの搬入経路が依然として重要であったのではないか，というきわめて興味深い指摘をおこなっている［新里 2018：152・155］。

以上，考古学側からの諸見解に対してとりとめもない疑問を述べてきたが，本節で提示したかった私なりの見方とは，問題の中国陶磁器を積載して倉木崎に来航したと推定される交易船は，博多などの九州地域から南下してきた小型の国内船であった可能性も視野に入れておくべきではないか，という 1 点につきる。現在のところ，このような私見を明証するような文献史料はみあたらないが，ここでいう国内船のイメージとしてはたとえば，以前拙論で紹介した，南宋期の歴史書『建炎以来繫年要録』巻 154・紹興 15（1145）年 11 月丁巳条にみえる，硫黄や麻布を積載し，日本人男女 19 人が乗り込んでいた，中国温州の平陽県に漂着した小船である。私はその論文で，問題の小船を薩摩硫黄島から博多に硫黄を運ぶ国内船ではないかと考えている［山内 2016］。

なお，倉木崎海底遺跡との関連性を直接証明する史資料はいまのところ発見されていないものの，

宇検村内には前近代の中国商船のものと推定される碇石が3点残されており［宇検村誌編纂委員会編2017：通史編Ⅰ第三章第二節・256，コラム・274］，私も2014年にそれらを実見している。日宋・日元貿易期の「南島路」の実態を考えるうえで，この碇石をどう評価するかは，さらに今後の課題である。

❺……14世紀半ば以前の琉球列島における硫黄交易

これまで4章にわたって，文献史学および考古学における「南島路」の実態とそこでの硫黄交易の状況に関わる研究を概観してきた。それらの研究ではもちろん，より個別的な事象については解釈・見解の違いもみられる。しかし，すくなくとも11世紀後半以降の琉球列島には北方の九州から南下する交易の流れがあったとする点や，14世紀後半に明と琉球諸王権の間で朝貢・貿易関係が確立される以前からすでに，琉球列島を経由して福建地域と結びつく交易ルートが機能していたという点では見解がほぼ一致しており，このような交易ルートの存在は現時点での文献史学・考古学双方における共通認識であるといえよう。そして，このような共通認識は，本稿が考察の主軸とする南西諸島地域における硫黄交易史研究にきわめて重要な示唆を与えてくれる。

すなわち，さきの第2章第2節において，琉球から明に硫黄が進貢され始めた時期の問題点として，

①明皇帝と琉球諸王権の朝貢・貿易関係が形成された当初から，琉球から明に「トン単位」の硫黄が継続的に進貢されているが，このような状況は1370年代においてすでに，三山王権の根拠地の沖縄島で「トン単位」の硫黄が確保できるほどの硫黄流通ネットワークが確立されていたことを前提にしなければ理解し難い。

②中山・山北・山南のすべての王から硫黄の進貢がおこなわれているが，このような状況の背後には，三山の各王権に硫黄の供給を請け負う共通する交易勢力が存在していた可能性が高い。

というふたつの論点を指摘したが，これらの論点は，上述の「南島路」をめぐる共通認識を援用することにより，以下のような理解が可能となるのではなかろうか。

（1）1370年代以前における硫黄流通ネットワークの形成

まず，琉球から明への硫黄の進貢が始まった1370年代以前にすでに，沖縄島周辺地域で硫黄の流通ネットワークが確立されていたのではないか，という点について考えてみたい。これまで紹介してきた文献史学・考古学の諸成果を通じて，1370年代に琉球と明の間で朝貢・貿易関係が形成される以前から，すくなくとも福建地域と琉球列島を結ぶ交易ルートが機能していたことは共通認識となっている。この交易ルートが形成された時期としては，今帰仁・ビロースクタイプの白磁が琉球列島に流入し始める13世紀後半というのがもっとも可能性の高い時期となろう。

このような歴史状況を前提とすれば，本稿が注目する南西諸島海域での硫黄交易に関しても，1370年代に朝貢・貿易関係が開始された当初から琉球より明に「トン単位」の硫黄を継続的に送ることができたのは，13世紀後半においてすでに形成されていた福建地域と沖縄地域を結ぶ新たな交易シ

ステムのなかに硫黄の交易システムも含まれていたためであるとは考えられないであろうか。このような想定が認められるならば，13 世紀後半～ 14 世紀前半にはすでに，沖縄地域から中国への硫黄の輸出がおこなわれていたということになる。

（2）硫黄供給を請け負った交易勢力

つぎに，三山王権に硫黄の供給を請け負った交易勢力が存在していた可能性について検討してみたい。11 世紀以前における琉球列島は，沖縄島と宮古島の間に広がる 300km 弱の宮古海峡をさかいに，南北ふたつの文化圏に分れていた。そして 11 世紀後半になると，九州地域などの北からのヒトやモノの南下の動きが活発化し，中国産白磁，長崎産の滑石製石鍋，徳之島産のカムィヤキなどの共通する交易品が宮古海峡を越えて先島諸島にまでもたらされ，一体的な文化圏が形成された［池田 2007，2012，2019］。このような交易品を琉球列島一帯にもたらした人びととして有力視されているのは，日本や中国の海商たちである。

池田榮史は，11 世紀以降の日宋貿易の展開にともなって，宋商人が琉球列島近海を往来する機会が増大し，彼らによる南島産物の直接調達がおこなわれたという可能性を想定している［池田 2010：127］。また，新里亮人は，11 世紀前後の日本列島における貿易商品の流通は，集散地として機能した博多から放射状に展開しており，琉球列島はその商業圏の南縁に位置づけられていたとみる。そして，日宋貿易や日麗貿易の動きと連動しながら，この流通構造を通じて中国産白磁・滑石製石鍋・カムィヤキなどが琉球列島各地に運ばれ，とくに 11 世紀中頃に先島諸島に到達する食器類の流通には，博多を発着点とする商船が深く関わっていたと推定している［新里 2018：142］。これらの見解からうかがえるように，11 世紀後半以降の琉球列島における一体的な文化圏の形成には，九州など北からのヒトやモノの流れが決定的な影響を与えたと考えられるのであり，このような交易の展開のなかで日本や中国の海商たちが南西諸島海域をしばしば往来するという状況がみられたはずである。ただ，もちろん，海商たちだけがこの海域を行き来したのではない。池田榮史が想定するように，北方の九州などからは海商以外も含めて多くの人びとが琉球列島に移動・移住し，各地に拠点を形成していったのである［池田 2012：292］。

池田はさらに，このような日本列島内部の人びとの南下の動き以外に，中国の福建や広東などから移動してきた人びとも加わり，多様な人びとの活動を通じて琉球国の形成が進められたという興味深い見通しを述べている。ここにみえる，中国からのヒトの移動をうかがわせる考古学的な徴証として池田が注目するのが，先述の 13 世紀後半以降の今帰仁・ビロースクタイプと呼ばれる福建産粗製白磁の琉球列島への流入である［池田 2012：295-297］。

以上のような 11 世紀後半以降のヒトの流れに関する考古学的想定にもとづいて琉球列島海域での商人たちの動きを概観すると，まず九州から南下した商人たちがその海域を往来し，ついで 13 世紀後半になると福建・広東など中国の商人がその海域を北上して活動するようになったということになる。なおここで，琉球列島の海域を往来したのが「日本の」商人・交易船なのか，それとも「中国の」商人・交易船なのかという問題は，さほど重要ではないであろう。というのも，たとえば『高麗史』巻 10・宣宗 10（1093）年 7 月癸未条に，「宋人」12 人と「倭人」19 人が乗り組んだ，おそらくは日宋貿易に従事した商船の記録がみえるように，当時の東シナ海域を航行した交易船はしばし

ば日本と宋の人びとの協業によって運営されていたと推定されるからである。

とりあえず現時点では，このような考古学的な想定で指摘されている，11世紀後半以降に琉球列島海域をしばしば往来していた日本・中国の商人たちこそが，三山王権に硫黄の供給を請け負っていた交易勢力の最有力候補であるとしておきたい。

（3）硫黄鉱山としての硫黄鳥島の発見

第2章第2節でも述べたように，これまで検討してきた，1370年代以前における硫黄交易システムの形成や硫黄供給を請け負う交易勢力の存在には，さらにそれ以前のどこかの時点で，何者かが硫黄鳥島での硫黄の産出を発見し，それが対中国向けの重要な交易品となりうることを明確に認知していた，という歴史的前提が不可欠である。

では，いつ頃，どのような人びとが，硫黄鳥島での硫黄の産出とその商品価値を発見したのであろうか。もちろん，この疑問に明確な回答を与えるような文字史料は残されておらず，ここでも上述の考古学研究の想定に依拠することになる。そうするとやはり，硫黄鳥島での硫黄の産出とその商品価値に最初に気づいたのは，11世紀後半以降に琉球列島の海域を往来していた日本・中国の海商たちである可能性がきわめて高いということになる。

この推定に関してはたとえば，吉成直樹が「11世紀後半以降に喜界島を交易拠点としつつ琉球弧を南北に航海していた人びとが，硫黄産地としての硫黄鳥島の存在に気づかなかったとは考えにくい」と指摘し，さらに「琉球弧から出土する白磁の一部は，硫黄の交換財として日本商人の手に渡り，さらに南方物産の交換財として琉球弧にもたらされた場合もあった」と推測している［吉成2011：153・157］。また，高梨修も，「硫黄鳥島における硫黄交易の起源は不明であるが，高麗の陶工が直接的に関与したと考えられる窯業生産が営まれていた島から明瞭に目視できる硫黄産出の島について，キカイガシマ交易に従事していた商業集団が認識できない事態は想定しにくい。日宋貿易における硫黄交易の展開に伴い，硫黄島だけではなく，トカラ列島の口之島・中之島・諏訪之瀬島・悪石島・横当島さらには奄美群島の真横に位置する硫黄鳥島が開発対象とされた可能性は否定できない」と推測している［高梨2012：358］。

日本列島から中国への硫黄の輸出は10世紀末～11世紀初頭の日宋貿易の開始と同時に始まっており，そのときの有力な硫黄産地のひとつは，薩摩半島の南方50km程（硫黄鳥島からは北東方向に380km程）に浮かぶ火山島の硫黄島（薩摩硫黄島）であった［山内2009］。そうすると，11世紀後半以降に九州などから琉球列島に南下した海商たちはすでに，火山島では硫黄が産出するという知識をもっており，さらにそこで採掘される硫黄が日宋貿易の重要な交易品となることも認知していたと考えられる。このような海商たちの交易品としての硫黄に関する知識をかいまみることができるのが，11世紀半ばの藤原明衡『新猿楽記』である。この文学作品には，八郎真人という架空の大商人が登場するが，その人物像は当時実際に活躍していた大商人たちをモデルにしている可能性が高いと考えられている。この八郎真人は作品のなかで，東は東北地方のエミシの地から，西は薩摩南方のキカイガシマにいたるきわめて広範囲な地域を股にかけて商売を営んでいる，と人物設定がなされている。そして，この大商人が取り扱う商品のなかに宋への輸出品と思われる硫黄がみえ，その硫黄の産地としてもっとも可能性が高いのが薩摩南方のキカイガシマと呼ばれる島嶼域である

と考えられるのである。

そうすると，上述の 11 世紀後半以降にしばしば琉球列島まで南下した商人たちのなかに，火山島の硫黄鳥島での硫黄の産出に気づき，その硫黄が中国向けの重要な交易品となりうることをはっきりと認識した人びとがいた可能性が想定される。つまり，硫黄鉱山としての硫黄鳥島は，明と琉球の朝貢・貿易関係が形成される 14 世紀後半のはるか以前に，日宋貿易の展開と連動して発見されていた可能性が高いのである。

さらに推測を重ねれば，考古学的には 13 世紀後半以降にみえてくる福建から琉球列島に向かうヒトの流れのなかに，すでに発見・開発されていた硫黄鳥島の硫黄の入手を目的のひとつとして来航してきた海商たちもいたのではなかろうか。もちろん，このような想定を明証するような文字史料が残されているわけではない。ただ，『中山世鑑』などの近世沖縄の歴史書に記される 1392（洪武 25）年の，いわゆる「閩人三十六姓」の賜与以前あるいは明王朝の成立以前から，すでに多くの華人が沖縄島に渡来して活動していたという推定［真栄平 1992：250-251，上里 2010：141，岡本 2010：31-34，村井 2019：121-122］を勘案すれば，まったくありえない歴史状況とはいえないであろう。

なお，ここでさらに考慮しなければならない問題のひとつとして，先述のように先島・沖縄諸島とは対照的に奄美諸島において福建産粗製白磁の出土があまりみられないにもかかわらず，地理的には奄美諸島の一角に位置する硫黄鳥島の硫黄交易に華人海商たちが関与していたと推定してよいのか，という疑問もある。この問題に関しては，たとえば華人海商たちが交易目的地としたのがピンポイントで硫黄鳥島のみであったためという可能性も考えられるかもしれないが，より可能性が高い状況として，九州方面から南下する商人たちによって沖縄島あたりに硫黄鳥島産硫黄の集積地が形成され，華人海商たちはその集積地に来航すれば硫黄交易が可能であった，という状況を推定してみたい。しかしいずれにしろ，このような想定を明証する文献史料や考古資料は現在のところみあたらない。

ちなみに，硫黄鉱山としての硫黄鳥島の発見の契機として，16 世紀半ばの史料ではあるが，先述の鄭舜功『日本一鑑』の桴海図経・巻 2 に収載される「滄海津鑑」と題された航路図はきわめて興味深い素材である。その絵図では「大琉球国」の北方に「硫黄山」が描かれているが，その島の頂には噴気と思われる複数の縦の線が書き込まれており，この島はまさに硫黄鳥島に比定できる。これもすでに述べように，鄭舜功は中国南部から実際に琉球列島を経由して九州に至っており，この絵図に書き込まれている噴気は彼が海上から実見したものと考えてよいであろう。とすれば，日宋貿易の展開のなかでこの硫黄鳥島の近海を航行した海商たちが，この噴気を目視して硫黄鳥島が火山島であることに気づき，そこで硫黄が産出することを発見したという可能性は高いのではなかろうか。また，私は 2018 年 11 月 18 日に硫黄鳥島の現地調査をおこなったが，船で島を周回していた際に，島の北部の硫黄を採掘していた火口の沖合（200 ～ 300m 程？）にさしかかったとき，火口から噴出された硫化水素の臭いをはっきりと感じた。この体験は，硫黄鉱山としての硫黄鳥島発見の契機として，噴気という視覚情報だけでなく，硫化水素の臭気という嗅覚情報もまたその契機となりうる可能性を物語っている。

これまでみてきたように，いくつかの想定される状況を重ねあわせていくと，硫黄鉱山としての

硫黄鳥島はすでに日宋貿易の時期に北方から琉球列島海域に南下した人びとによって発見されており，13世紀後半以降には中国南部と琉球列島を結ぶ交易ルートの動因のひとつともなった可能性が高い。そのことを明証する文献史料や考古資料はいまのところみつかっていないが，文献史料として，第3章第2節で検討を加えた『島夷誌略』「琉球」条にみえる「硫黄」は，硫黄鳥島産の硫黄である可能性も考えられる。また，考古資料としては，現時点で硫黄鳥島において発見されている中国陶磁は1997年の学術調査団によって採取された15世紀後半～16世紀頃のもののみであるが［盛本2002］，本稿の想定からすれば，さらに現地調査を重ね，集落・御嶽・硫黄鉱山跡あるいは海中調査も含めた沿岸部の探索を慎重におこなうことにより，14世紀あるいはそれ以前の中国陶磁が発見される可能性は高いように思われる。

おわりに

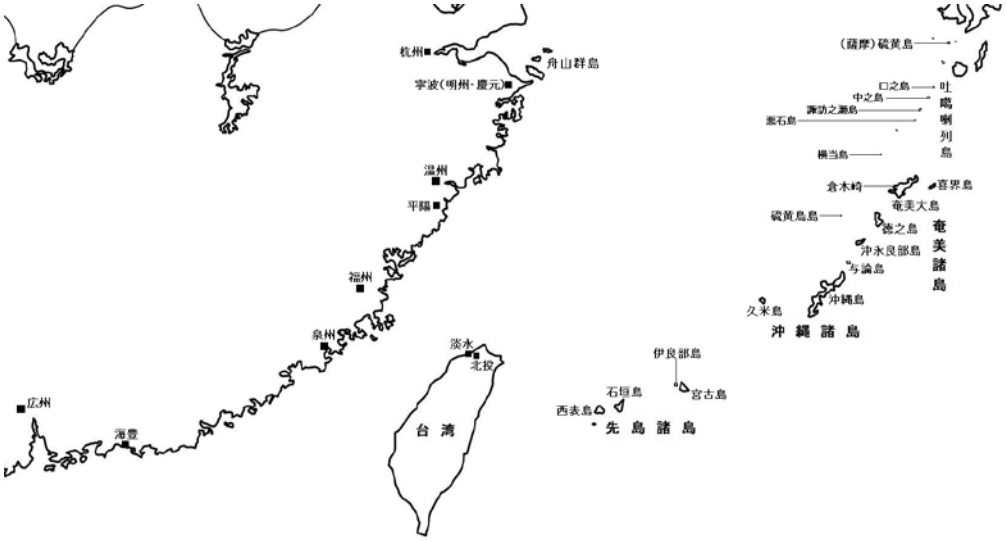
以上，本稿では，近年の私の中心的な研究テーマである硫黄交易史の視座を主軸として，明代以前の「南島路」の実態を検討してみた。その結果，沖縄の硫黄鳥島が中国向けの硫黄の鉱山としてこれまで考えられている以上に古くから稼働し始めていた可能性や，そこで産出された硫黄が沖縄島に分立した諸王権と明王朝との政治・経済関係の形成の初発の時点においても軍需物資として重要な役割を演じていた可能性などを推定した。このような推定をさらに敷衍すれば，沖縄における三山や琉球国の王権が，ひとつの側面として，軍需物資（火薬原料）としての硫黄の安定供給という，「硫黄の王権」とでも呼ぶべき役割を明王朝から期待されていたという解釈も可能なのではなかろうか。このように考えてくると，三山と明王朝との朝貢関係の形成当初において貢物の主軸とされた，軍需物資としての馬と硫黄のうち，やがて馬の貢上が停止され，その他の貢物も種々変化していったいっぽうで，硫黄が「常貢」として清朝期になっても貢進され続ける背景には，このような琉球の「硫黄の王権」としての歴史的役割が存在し続けていたのではなかろうか。とすれば，今後，南西諸島史あるいは琉球史において硫黄が果たした歴史的役割について，さらに検討が深められる必要があろう。

なお，本文中でも何度もくりかえしたように，「南島路」の具体像を記録した文献史料がまったくといってよいほど残されていないため，本稿で論及した主要な論点のほぼすべてに関して，めざましく進展している考古学研究の成果におおきく頼らざるをえなかった。ただ，私はあくまでも文献史学に軸足を置く研究者なので，それらの考古学的な成果・データの取り扱い方や解釈において，無自覚におおきな誤りを犯しているかもしれない。忌憚のないご批正をいただければ幸いである。

＜補記＞

本稿の審査中に，中村翼「琉球王国の形成と東アジア海域世界」（秋田茂・桃木至朗編『阪大リーブル72 グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育―日本史と世界史のあいだで―』大阪大学出版会，2020年3月）が刊行された。本稿の内容とも密接に関わる諸見解が提示されているが，本稿の刊行スケジュール上，大幅に改稿してその成果を逐一とりこむことはできなかった。中村氏のご寛恕をお願いするとともに，あらためて議論する場をもちたいと思う。

また，本稿の編集中に，岩元康成「南九州から奄美群島の貿易陶磁流通」（『貿易陶磁研究』40，2020 年 9 月）が刊行され，その 89 頁でも，倉木崎海底遺跡の中国陶磁片について「博多から九州南部などへ往来した船が流されて残した」という，本稿と同じような想定が述べられている。あわせて参照をお願いしたい。



主要関連地名地図

註

（1）――硫黄鳥島の自然環境や歴史に関する総合的な情報については［沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編 2002］，［長嶋 2011］など参照。また，この島での硫黄採掘の歴史に関しては，フォトジャーナリストの桂博史による新聞連載記事［桂 2016］も貴重な情報を提供してくれる。

（2）――薩南諸島に属する鹿児島の硫黄島（薩摩硫黄島）では，日宋貿易の開始期にあたる 10 世紀末～ 11 世紀初頭頃にはすでに硫黄の採掘が始まっており，そこで産出された硫黄がおもに火薬原料として宋～明代の中国に輸出されていたと考えられる［山内 2009・2019］。この硫黄産地としての薩摩硫黄島に関連して，［小葉田 1976：193-194］では，1756 年の冊封琉球使である周煌の『琉球国志略』巻 14・物産・硫黄の項などによりながら，琉球が硫黄鳥島産の硫黄にその島で採鉱された硫黄もまじえて明に進貢していた可能性を指摘している。もちろん，その可能性を否定しさることはできないが，その推定の根拠として，まず，「「本草綱目」に，庚辛玉冊の「石硫黄生南海琉球山中，倭硫黄亦佳」とあるを引いて「是琉球人此物ヲ薩摩ニ得テ琉球硫黄ト称シ唐土に渡セルヲカク記セシナラム」というのはおおよそ当たっていると思う」と述べられている。この文章の「是琉球人～記セシナラム」という文言は一見，『本草綱目』からの引用のように読めるが，同書にはそのような文言はない。そもそも問題の文章は内容や用語の点からみて日本人による注解ではないかと推測されるが，いずれにしろ，すくなくとも小葉田の当該論文からは，その出典を読みとることはできない。また，『琉球国志略』の「亦出吐噶喇」という文言について，「吐噶喇列島には（薩摩―山内補）硫黄島は厳密にいえば含まれぬが相錯入したのかも知れぬ」と述べているが，とくに明確な根拠を示していない。ちなみに，本文中でもふれる『海東諸国紀』では，「日本国西海道九州之図」の（薩摩）硫黄島に「硫黄を産し，日本人之を採る」と注記されており，いっぽうで「琉球国之図」の（硫黄）鳥島には「此の島の硫黄は，琉球国の採る所なり」と注記されていることよりみて，すくなくとも同書が編まれた 15 世紀後半には，薩摩硫黄島は日本人用の硫黄鉱山，硫黄鳥島は琉球国用の硫黄鉱山と

いう縄張りがあったと考えられる。ただ，くりかえしになるが，日本人が採鉱した薩摩硫黄島の硫黄が海上交易により琉球にもたらされ，さらにそれが硫黄鳥島産の硫黄とともに明に進貢された可能性を完全には否定できない。とはいえ，そのような流通過程を記した史料はみあたらない。以上のような理由により，本稿では，琉球が明に進貢した硫黄はほぼ硫黄鳥島産であると考えて論を進めたい。

（3）――ちなみに，この記録から80年程のちの申叔舟『海東諸国紀』の「琉球国之図」では「小崎恵羅武」と表記されている。

（4）――なお，上記千竈氏の処分状にも「ゑらふのしま」が登場するが，村井はこれを屋久島の西方の「口永良部」島に比定している［村井1997：114］。

（5）――伊波普猷は，この「才孤那」という人名の考証にあたって，上掲の『中山伝信録』の記事に関して，「東恩納君が「中山伝信録の地図に依ると，知念間切の中に，蘇姑耶と云ふ地名を註してあるが，恰度今の志喜屋の地点に当るのである。才孤那とは或は蘇姑耶ではなからうか。若し然らば，東四間切の住民が明に貢する硫黄を遠く台湾島の附近にまでも探つた事が分るのである」といつたのは面白いが，才孤那について，私は異なつた見解をもつてゐる」と，東恩納寛惇の見解を引用している［伊波1974：147］。この伊波の引用からすれば，東恩納寛惇は才孤那たちが硫黄を採掘しようとした目的地を台湾と推定しており，それはより具体的には小葉田淳とおなじく台湾島北部の北投鉱山を想定していたと考えられる。しかし，伊波が引用する文章と類似する東恩納の文章は『東恩納寛惇全集』7（南島風土記）の島尻郡・知念村の項にみえるものの，そこでは「若し然らば，東四間切の住民が明に貢する硫黄を遠く台湾島の附近にまでも探つた事が分るのである」という文言はなく［琉球新報社編1980：147］，東恩納の全集の他の巻においても，伊波の引用と同文の叙述はみあたらない。

（6）――この点について小葉田淳は微妙な見解のブレをみせている。というのも，［小葉田1976（初出1933）：194］では，この硫黄採鉱地を「私は台湾台北州北投の硫黄鉱区であると信じている。これらに関する論証はすべて次にゆずる」としているが，この数年後に刊行された［小葉田1993（初出1939）：277］では，「硫黄は古くより鳥島より採取した。皇明実録洪武二十五年五月己丑の条に「才孤那等駕舟河蘭埠採硫黄于海洋」とある。河は或は阿の誤で，阿は伊・永の訛であり，伊蘭埠は永良部であろう。〈中山伝信録巻四〉日本一鑑に「熱壁山南風用正癸鍼，約至四更取硫黄山，山産硫黄，在於本山阿蘭埠」とあり，熱壁山は葉壁山即ち伊平屋島，硫黄山は鳥島である。在於本山阿蘭埠とはたぶん右の実録に拠り記したものである」として，台湾の北投鉱山についてはふれていない。

（7）――なお，『島夷誌略』琉球条の末尾にみえる「海外の諸国，蓋し此れ由り始る」という記述は，福建地域の海商たちが台湾島および琉球諸島との交易に進出し始めた時期を推定するにあたって重要なヒントを提供するデータとして注目される。というのも，この記述はおそらく，南海諸国の地理情報が記された南宋期の周去非『嶺外代答』（1178年頃成書）から趙汝适『諸蕃志』（1225年頃成書）にかけて形成される，福建の泉州と三仏斉（スマトラ）を結ぶラインの東側のフィリピンからジャワにかけての海域に対する「東洋」という地理観念および航路の成立［山本1933，宮崎1942］と深く関わる記述と推測されるのである。つまり，『島夷誌略』の問題の記述は，そのような「東洋」航路の発展のなかで，福建地域から台湾島さらにはその先の琉球諸島への海商たちの渡航がしだいにおこなわれるようになり，明と三山王権の朝貢関係が形成される以前の13世紀あるいはすくなくとも14世紀前半においてすでに，「琉球」がその「東洋」＝「海外の諸国」への門戸として機能していたことを物語っていると考えられるのである。

（8）――なお，台湾の文献史学研究者の陳宗仁も，淡水河河口部や琉球列島で発見される中国の銅銭や磁器は，唐・宋代以降の中国における海外交易の隆盛のもとで，中国商人たちが琉球諸島や台湾島に来航したことの証左ではあるが，その交易の規模がごく限られたものであったために中国史籍の記録からは交易の事実が漏れてしまったと推測している［陳宗仁2005：36］。

（9）――久米島の中国陶磁の出土状況については，［中島徹也・髙島裕之2015］も参照。

(10)――もしこれらの中国陶磁片が倉木崎の海峡部部分で沈没した船の遺物であるとしたら，船体の一部や金属製品を含めた他の積荷も海底に残されていてもよいはずである。しかし，2014年の九州国立博物館による各種探知機を駆使した追加調査においても，それらの遺物は確認されなかった［宇検村誌編纂委員会編 2017：通史編Ⅰ第三章第二節・255，コラム・274］。海底にまだ陶磁器が残されている可能性は否定できないが，結局，現在のところすでに採集されている2,300点余の中国陶磁片しか遺物はみつかっていない。

(11)――近年，倉木崎海底遺跡の南方30km程に位置す

る与路島で「綱」の字が墨書されている中国白磁片が採集されたが，この遺物や倉木崎海底遺跡の陶磁片を総体的に評価することにより，あるいは奄美地域における中国商船の来航が主張できるかもしれない。ただ，たとえば兵庫県の大物遺跡のように，中国商船の来航があったとは考え難い場所でも数点の「綱」字が墨書された中国陶磁片が出土しており，博多のような拠点的な貿易港でなくともごく少数の墨書陶磁片が出土する可能性はある。なお，大物遺跡に関しては，西隣の大輪田泊での「日宋貿易の盛行」という通説が想起されるかもしれないが，大輪田泊に数多くの宋商船が来航して盛んに日宋貿易がおこなわれていたという状況は，存在しなかった可能性が高い［山内 2012］。

参考文献

池田榮史 2007 「古代・中世の日本と琉球列島」『東アジアの古代文化』130

――― 2010 「グスク文化の形成と東アジア」沖縄県文化振興会史料編集室編『沖縄県史 各論編 3 古琉球』沖縄県教育委員会

――― 2012 「琉球国以前―琉球・沖縄史研究におけるグスク社会の評価をめぐって―」鈴木靖民 編『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館

――― 2019 「琉球列島史を掘りおこす―十一～十四世紀の移住・交易と社会的変容―」中世学研究会（編）『中世学研究 2 琉球の中世』高志書院

伊波普猷 1974 「孤島苦の琉球史」服部四郎・仲宗根政善・外間守善編『伊波普猷全集 第 2 巻』平凡社（原刊：『孤島苦の琉球史』春陽堂，1926）

上里隆史 2010 「琉球の大交易時代」荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係 4 倭寇と「日本国王」』吉川弘文館

宇検村教育委員会編 1999 『宇検村文化財調査報告書第 2 集 鹿児島県大島郡宇検村倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』宇検村教育委員会

宇検村誌編纂委員会編 2017 『宇検村誌 自然・通史編』宇検村教育委員会
「通史編Ⅰ第三章第一節 考古資料からみた中世の宇検村」（新里亮人）
「通史編Ⅰ第三章第二節 倉木崎海底遺跡」（手塚直樹）
「通史編Ⅰ第三章第三節 倉木崎海底遺跡と東アジア海域世界」（金沢陽）
「通史編Ⅰ第三章コラム 倉木崎海底遺跡と水中考古学」（木村淳）

榎本　渉 2007a 「明州市舶司と東シナ海海域」『東アジア海域と日中交流―九～一四世紀―』吉川弘文館

――― 2007b 「元末内乱期の日元交通」『東アジア海域と日中交流―九～一四世紀―』吉川弘文館

――― 2010a 「東シナ海の宋海商」荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係 3 通交・通商圏の拡大』吉川弘文館

――― 2010b 『選書日本中世史 4 僧侶と海商たちの東シナ海』〈講談社選書メチエ 469〉講談社

王 淑 津 2009 「記臺灣北海岸埤島橋與大坌坑遺址的龍泉青瓷新資料」『故宮文物 月刊』311

王 淑 津・劉 益 昌 2010 「大坌坑遺址出土十二至十四世紀中国陶瓷」『福建文博』2010-1（総 70）

大田由紀夫 2009 「ふたつの「琉球」―13・14 世紀の東アジアにおける「琉球」認識―」木下尚子編『〈科学研究費補助金（基盤研究（A）(2)）研究成果報告書 平成 17-20 年度〉13 ～ 14 世紀の琉球と福建』熊本大学文学部木下研究室

大庭康時 2019 『博多の考古学―中世の貿易都市を掘る』高志書院

岡本弘道 2010 『琉球王国海上交渉史研究』榕樹書林

沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編 2002 『沖縄県史 資料編 13 硫黄鳥島』沖縄県教育委員会

桂　博史 2016 「検証 硫黄鳥島 第 1 章 王国を築いた鉱物資源 1-5」『琉球新報』7/29・30，8/2・3・8

亀井明徳 1993 「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』11

――― 1997 「琉球陶磁貿易の構造的理解」『専修人文論集』60

木下尚子 2009 「総括」木下尚子編『〈科学研究費補助金（基盤研究（A）(2)）研究成果報告書 平成 17-20 年度〉13 ～ 14 世紀の琉球と福建』熊本大学文学部木下研究室

――― 2014 「貿易陶磁からみた 10 世紀から 16 世紀における琉球列島・中国福建・台湾の関係」『熊本大学文学部論叢』105

小葉田　淳 1968 『中世南島通交貿易史の研究』刀江書院（再刊）
――――― 1976 「中世における硫黄の外国貿易と産出」『金銀貿易史の研究』法政大学出版局
周 婉 窈 2007 「山在瑶波碧浪中―總論明人的臺灣認識」『臺大歴史学報』40
新里亮人 2018 『琉球国成立前夜の考古学』同成社
Sun Laichen（孫来臣，中島楽章訳）2006 「東部アジアにおける火器の時代：1390-1683」『九州大学東洋史論集』34
瀬戸哲也 2019 「考古学からみた那覇港の形成と景観」中世都市研究会（編）『港津と権力』山川出版社
曹 永 和 1979 『台湾早期歴史研究』聯経出版事業公司
――――（外間みどり訳）1992 「明洪武朝の中琉関係」『浦添市立図書館紀要』4
台湾省文献委員会編 1960 『台湾省通志稿 巻4 経済志鉱業篇』台湾省政府印刷廠（印刷者）
――――― 1977 『台湾史』衆文図書股份有限公司
高梨　修 2012 「キカイガシマ海域と日宋貿易―「古代～中世におけるヤコウガイの流通」再論―」鈴木靖民編『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館
高橋公明 1994 「琉球王国」朝尾直弘他編『岩波講座日本通史 10 中世4』岩波書店
田中克子 2009 「生産と流通」木下尚子編『〈科学研究費補助金（基盤研究（A）(2)）研究成果報告書 平成17-20年度〉13～14世紀の琉球と福建』熊本大学文学部木下研究室
陳 宗 仁 2005 『雞龍山与淡水洋：東亜海域与台湾早期研究 1400-1700』聯経出版事業股份有限公司
陳 信 雄 1992 『宋元海外発展史研究』甲乙出版社
――――― 1993 「從琉球出土中國陶瓷窺探中琉關係」琉球中国関係国際学術会議編『第四回琉中歴史関係国際学術会議 琉中歴史関係論文集』琉球中国関係国際学術会議
得能壽美 2010 「中山王権と宮古・八重山」沖縄県文化振興会史料編集室編『沖縄県史 各論編3 古琉球』沖縄県教育委員会
豊見山和行 2002 「琉球王国時代における硫黄鳥島史の諸相」沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『沖縄県史 資料編13 硫黄鳥島』沖縄県教育委員会
中島徹也・髙島裕之 2015 「久米島宇江城・具志川城跡出土貿易陶瓷の諸問題」『貿易陶磁研究』35
長嶋俊介 2011 「硫黄鳥島の奄美群島との近接性と歴史・生活痕跡」『南太平洋海域調査研究報告書』51
橋本　雄 2005 「肥後地域の国際交流と偽使問題」『中世日本の国際関係―東アジア通交圏と偽使問題―』吉川弘文館
――――― 2007 「中世の国際交易と博多―“大洋路”対“南島路”」佐藤信・藤田覚編『前近代の日本列島と朝鮮半島』山川出版社
平田　守 1986 「琉明関係における琉球の馬」『南島史学』28
真栄平房昭 1992 「対外関係における華僑と国家―琉球の閩人三十六姓をめぐって―」荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史Ⅲ 海上の道』東京大学出版会
宮城弘樹・新里亮人 2009「琉球列島における出土状況」木下尚子編『〈科学研究費補助金（基盤研究（A）(2)）研究成果報告書 平成17-20年度〉13～14世紀の琉球と福建』熊本大学文学部木下研究室
宮崎市定 1942 「南洋を東西洋に分つ根拠に就いて」『東洋史研究』7-4
村井章介 1997 「中世国家の境界と琉球・蝦夷」村井章介・佐藤信・吉田伸之編『境界の日本史』山川出版社
――――― 2019 『角川選書 616 古琉球 海洋アジアの輝ける王国』KADOKAWA
森　克己 2009 「日宋交通と地理学的世界観―特に栗棘庵の輿地図について」新編森克己著作集編集委員会編『新編森克己著作集3 続々日宋貿易の研究』勉誠出版
森　達也 2013 「日本出土の中国唐宋元代の陶磁」アジア考古学四学会編『アジアの考古学1 陶磁器流通の考古学―日本出土の海外陶磁―』高志書院
――――― 2015 「12～14世紀東アジアの陶磁貿易ルート―福建ルートと寧波ルートをめぐって―」『中国青瓷の研究―編年と流通―』汲古書院
――――― 2019 「大陸と列島をつなぐ陶瓷器流通ルートの様相―11～12世紀を中心に―」藪敏裕・森達也・徳留大輔（編）『貿易陶磁器と東アジアの物流―平泉・博多・中国―』高志書院
盛本　勲 2002 「硫黄鳥島の考古調査」沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『沖縄県史 資料編13 硫黄鳥島』沖縄県教育委員会
山内晋次 2009 『日本史リブレット 75 日宋貿易と「硫黄の道」』山川出版社
――――― 2012 「平氏と日宋貿易―通説的歴史像への疑問―」『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』6
――――― 2014 「東アジア海域論」大津透他編『岩波講座日本歴史 20 地域論』岩波書店

――― 2016 「宋代温州に漂着した日本船―「硫黄の道」研究のひとこま―」亀井明徳さん追悼文集刊行会編『亀井明徳氏追悼・貿易陶磁研究等論文集』亀井明徳さん追悼文集刊行会
――― 2019 「海を渡る硫黄―14-16 世紀前半の東アジア海域―」鈴木英明編『中国社会研究叢書 21 世紀「大国」の実態と展望 7 東アジア海域から眺望する世界史―ネットワークと海域』明石書店
山里純一 1993 「『隋書』流求伝について―研究史・学説の整理を中心に―」『琉球大学法文学部紀要』史学・地理学篇 36
山本達郎 1933 「東西洋といふ呼称の起源に就いて」『東洋学報』21-1
吉成直樹 2011 『琉球の成立―移住と交易の歴史』南方新社
――― 2018 『琉球王権と太陽の王』七月社
琉球新報社編 1980 『東恩納寛惇全集 7（南島風土記―沖縄・奄美大島地名辞典）』第一書房
渡邊　誠 2015 「平安・鎌倉期「唐船」考」『九州史学』170

（神戸女子大学文学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2020 年 1 月 27 日受付，2020 年 7 月 9 日審査終了）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
Vol.223 March 2021

The South Island Route and Sulfur Trade between Japan and China in the Song and Yuan Periods

YAMAUCHI Shinji

As far as existing historical records are concerned, present-day philological historians cannot escape the conclusion that the East China Sea Route, also known as the Ocean Route, running from Hakata through the Zhoushan Islands and Mingzhou (Qingyuan) to Hangzhou was the main sea route between Japan and China in the Song and Yuan periods (from the late 10th to the mid-14th century). However, during the transition from the Yuan to the Ming Dynasty in the mid-14th century, the so-called South Island Route connecting Japan to Fujian in southeast China through a group of islands in southwest Japan, or more specifically, running (from Hakata) through Takase in Higo Province, Satsuma, and Ryukyu to Fujian, started to appear in historical records.

This paper examines an aspect of this South Island Route by comparing philological findings with archaeological findings mainly from the viewpoint of the history of sulfur trade between the Japanese Isles, especially the southwest islands, and China. As a result, this paper makes the following assumptions: (1) the sulfur mines in Io-torishima Island in Okinawa may have been put into operation earlier than previously thought to export sulfur to China; and (2) the sulfur produced in the island may have played an important role as an essential military material in the initial stage of establishing political and economic relations between sovereign authorities in Okinawa Island and the Ming Dynasty.

Key words: South Island Route, Ryukyu, Io-torishima Island, sulfur trade